（KU1－1）

二〇二三年度

入学試験問題

国語

最初に、以下の注意事項をよく読んでください。

一、問題冊子は監督（かんとく）者の指示があるまで開いてはいけません。

二、監督者の指示により、最初に問題冊子の表紙と解答用紙の、指定されたらんに**受験番号**と**氏名**を記入してください。

三、試験問題の内容に関する質問には応じません。それ以外の用事があるときは手をあげてください。

四、受験中気分が悪くなったときは、監督者に申し出てください。

五、字数に制限のある問題では「、」や「。」などの記号も一字と数えます。

六、解答用紙は持ち帰らないでください。

受験番号
1

氏名

〔一〕次の――線部のカタカナを、漢字に改めなさい。

① 時間がスイイする。
② 道路をカクチョウする。
③ 親コウコウをする。
④ 時代のチョウリュウにのる。
⑤ タンコウから掘(ほ)り出す。
⑥ キンロウ感謝の日。
⑦ マイキョにいとまがない。
⑧ 新しい規則をモウける。

〔二〕次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

匂いのこと、あるいは嗅ぐという動作にふれようとすると、どうしても話が隠微になる。匂いを、バラの花の〈香り〉といったようなところに限定すればいいのだが、靴下や下着の匂いといったところまでを考慮に入れなければならないとなると、ちょっと逃げたいような気持になる。〈香り〉とは、匂いの中で良いものとしていわば公認された匂いのことだが、〈匂い〉には非公認のものがあって、それらが匂いというものに、あるいは嗅ぐという動作に影をあたえている。

動物が嗅ぐのは、敵味方の判断、食えるものと食えないものの区別といった明快なものである。明快なのは、それが実用のものであるということである。それとくらべてみると、わたしたちの嗅ぐのは、そのような明快さからはぐれたものである。わたしたちが嗅覚を、生命とかかわるような実用で働かせるのはごく限られた局面であり、いわば文化的に働かせているわけである。

匂いは、微粒子が目に入らないわたしたちにとっては実体ではない。実体としてバラの香りがよいものであり、下着がよくない匂いなのかどうか判定することはできないし、その判断を誤ったからといって生命にかかわるわけでもない。匂いの美醜良 X は、文化の道筋として、つまり通り相場としてそうされているにすぎないのであり、わたしたちの鼻は、そういう通り相場を嗅いでいるといってよいのである。

わたしたちの五感は、まあほとんどが通り相場としてそうされているように、その道筋に沿って動いているといってよいのだろうが、他の感覚とくらべると、[1]嗅ぐことには特別のところがあるように思える。恥かしさとか隠微さがまつわるということなのだが、そこにはやはり、匂いの対象が実体ではなく、あるかないかといったものだからだろう。

1 あるかないかといったものを、これは良あれは悪とする基準がないということである。わたしたちには、基準の立てようのないもの、明確でなく不安定なものを相手にする時、[b]往々にしてそれを強い言葉で分けようとするところがある。わかりきったことは放っておけばよいのだが、不安定な状態にある時には、強く言い切ろうとするのだ。

2 目にとっての美醜よりも匂いの美醜の方にわたしたちは強い反応をする。美醜、好き嫌いの判定について、わたしたちの感覚の内で嗅覚は最も強く、〈見たくもない〉と言うより、〈匂いが我慢できない〉とか〈臭い〉と言った方がどうしようもない言葉になる。嗅覚と結びつけた言葉が強いということだ。

3 実体としての基準を明確にしえないから、文化的観念的な判断を強く打出すことになるのであり、そこで醜とされ悪とされたものをそうでもないと言おうとすると、その判断はきわめて私的なところでなされなければならなくなる。文化の共同的な立場から身を隠すことになるのである。

4 靴下や下着の匂いを嗅ぐことが恥かしいことになるのは、実体としてのいやな匂いを嗅ぐからではなさそうだ。文化の共同的な明るい世界から身をひそめる姿勢で嗅がれる非公認性をもつからではないだろうか。

私は、既成の文化の網の中で、表現という行為は、この匂いのような位置に似たところがありはしないかと感じている。表現は、非公認の、未だ共同化されていない私的な姿勢で抱えているものから生れるということであり、それをなんとか共同化できるものにしたいという欲望なのではないかということである。それは、匂いを例として考えると、いわばいやな匂いを良い匂いだとしようとするようなことなのである。そう

考えてみると、表現にはそういう、無謀のようなものがどうしても含まれるのだなあということがよくわかるように思えるのである。

納豆を食べる時によく思う。これは食べられない人にはとても食べられないだろうなと思うのである。はじめに口にした人のことを考えて感心したりもするが、やはりかなりすごい食べものである。

[2] 関西から西ではあまり納豆を食べないらしいが、食べつけない人には、あの匂いを食うことはとてもできないだろうと充分想像できる。だが、食う者にとってはちがう。納豆とネギの混ったあの匂いは、むしろ香りというべきものであり、それを嗅げば朝の鈍い食欲も力をかきたてられるほどのものである。

納豆は、匂いの良し悪しに（　Y　）な基準は存在しないということを教えてくれる。神の決めたものでなく、人間の、文化の決めたものだということである。先の言い方で言えば、「つまり通り相場としてそうされているにすぎない」のである。

だが、とも思わざるをえないものを感ずる。〈そうされているにすぎない〉とはいえ、では納豆を食べつけない人が、そう言われたからといって、目の前に出された納豆をすぐに口にできるかというと、そうはいかない。

わたしたちは、まっさらの世界に生れてくるわけではないし、一人で自分の感覚や判断をかたちづくるわけでもない。すでにある世界に生れ、その世界がつくりあげている判断を教えられて育つ。そして、その教えられた方は微に入る強い力であり、学んだ判断は案外身に染みたものとなる。

納豆の立てるあの種類の匂いは、ほぼ悪臭とされ、まして食物とは結びつかないものだという判断をわたしたちは身に染ませているので、食物とすることに抵抗を感じ、容易には口にできない。

殊に、嗅覚は、他の感覚にくらべて好き嫌いの振幅が大きく、嫌うとなるとその強さは他よりも激しいようだ。匂いは、呼吸とともに一旦体内に入れられて嗅がれる。そういう感覚の器官的特徴によっているのかもしれない。

良い匂いを体内に入れるのは喜びだが、悪い匂いも、それを感じる時にはすでにその匂いは体内に入っているのだ。排除したい匂いにもかかわらず、それはもうすでにこの体内に入ってきている。

〈臭い〉という表現は、その匂いがよくないというあっさりした判断ではない。この体内に理不尽に侵入したことへのどうしようもない憎しみのようなものがこめられていて、それをどうにかしろとでもいうような執拗なところがある。

[3] 〈見分ける〉と〈嗅ぎ分ける〉とをくらべてみても、〈見分ける〉の方があっさりしている。敵味方を見分けるのと、それを嗅ぎ分けるのとではずいぶんちがう。〈見分ける〉のは、たとえば暗がりの向こうにいる者の、顔かたちや服装で見分けて判断づけるということだが、〈嗅ぎ分ける〉には、それではすまない気配が感じられる。相手が味方の様子を備えていても、つまり〈見分け〉では味方としうるものも、まだ判断を保留してうかがう態勢をとっているようである。

納豆を食べなかった人が、食べられるようになり好むようになる。そうなったということは、どこかで、[4] 神が決めた悪臭と思われていたあの匂いが、臭いと〈されているにすぎない〉ものに流動化したからである。それが、この執拗でとらわれの強い嗅覚に起るということがおもしろい。

文化の硬直化した姿に出会い、制度的な貌に触れ、あるいは自分の、捨ててもよいと考えているものを

捨てられずにいるような時、私は納豆を思うことにしている。そんなものは〈通り相場にすぎない〉はずなのである。

（太田省吾『舞台の水』所収「嗅ぐ」　五柳書院　一九九三年　による）

問一　X に入る漢字一字を本文中から抜き出しなさい。

問二　――線a・bの語句の本文中における意味として最もふさわしいものを次のア～エの中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

a　通り相場

ア　科学的根拠を伴った世間の常識　　イ　鼻を通過して識別される匂いの特徴

ウ　世の中でまかり通っている迷信　　エ　あるものに対し一般に下されている評価

b　往々にして

ア　積極的にそうしようとする　　イ　周りに流されてそうしてしまう

ウ　まれにそうすることがある　　エ　たびたびそうしてしまいがち

問三　――線1「嗅ぐことには特別のところがあるように思える」のはなぜですか。最もふさわしいものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア　動物にとって嗅ぐという行為は見るや聞くよりも実用と密接に関わっているもので、靴下や下着の匂いを嗅ぐのは人間特有の行為で異様だから。

イ　嗅ぐという行為はある社会の中だけで共通に認識されている基準にしばられるので、そこで臭いと思われている匂いをかぐのは恥ずかしいことだから。

ウ　嗅ぐことの中でも、靴下や下着の匂いを嗅ぐことが恥ずかしいことになるのは、生命と関わるような実用の場面で働かせているのではないから。

エ　嗅ぐという行為の対象になる匂いは、香りと呼べるようなものばかりではなく、靴下の匂いのように臭いものもありそれが隠微な印象を与えるから。

問四　次の一段落は 1 ～ 4 のどの段落の後に入れるのが適当ですか、番号で答えなさい。

> 言いかえれば、私的であることの恥かしさと言ってよいかもしれない。私的な世界では、文化的にいやなものとされているものが、かならずしもそう感じないことも起りうる。

問五　――線2「関西から西ではあまり納豆を食べないらしいが、食べつけない人には、あの匂いを食うことはとてもできないだろうと充分想像できる」とありますが、地域によって特定の匂いに対して好悪が定まりがちな理由を筆者はどのように考えていますか。「～から」に続くように一文を抜き出し、その文のはじめの五字を書きなさい。

問六　（　Y　）に入る語として最もふさわしいものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア　文化的　　イ　相対的　　ウ　絶対的　　エ　個人的

問七　――線3「嗅ぎ分ける」とはこの段落ではどういう意味ですか。最もふさわしいものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア　じっくりと相手の腹を探ること　　イ　敵か味方かの判断を先延ばしにすること

ウ　外見に惑わされず匂いで区別すること　　エ　相手の狙いを見抜いて対抗策を練ること

問八　――線4「神が決めた悪臭と思われていたあの匂いが、臭いと〈されているにすぎない〉ものに流動化した」とはどういうことですか。その説明として最もふさわしいものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア　独特な匂いで食べられたものではないと思えるものも、食べ慣れれば美味しく感じられるものに変わっていくということ。

イ　納豆は臭くて食べられないという考えは個人的な好みではなく世間が形成したものだと気づくと、納豆を食べられるようになるということ。

ウ　他の感覚とくらべて好き嫌いの振幅が大きいという嗅覚の特性を知れば、悪臭だと感じる匂いに対しての認識が変化するということ。

エ　直感的に臭いに嫌悪感を覚えたものに対する印象が、当人の感覚の変化によってプラスに転じたということ。

問九　――線5「私は納豆を思うことにしている。そんなものは〈通り相場にすぎない〉はずなのである」とありますが、劇作家である筆者は納豆を思うとどうなれると考えていますか。一文で説明しなさい。

（下書き欄）

〔三〕次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

ぼく（高倉瑛介）は小学三年生である。血液中の血小板が少ない病気の経過観察のために、軽症者用の病棟での入院生活が一ヶ月間以上続いている。そこへ、低身長の検査入院（二泊三日）で同じ三年生の田波壮太がおととい入院してきた。二人はすぐに仲良しになった。

昼ごはんを食べ終えて歯を磨いた後、壮太が母親と一緒にぼくの病室にやってきた。壮太の母親は大きなバッグを持ち、壮太もリュックを背負っている。

「いろいろお世話になりました」

壮太の母親は、ぼくとぼくのお母さんに頭を下げた。

「ああ、退院ですね。お疲れさまでした」

ぼくのお母さんが言った。

「瑛介君に仲良く遊んでもらって、入院中、本当に楽しかったみたいで」

「うちもです。壮太君が来てくれてよかったです」

お母さんたちがそんな話をしている横で、ぼくたちはお互い顔を見合わせて、かといって今この短い時間で話す言葉も見当たらず、[1]ただなんとなく笑った。

「行こうか。壮太」

母親に肩に手を置かれ、

「瑛ちゃん、じゃあな」

と壮太は言った。

「ああ、元気でな」

ぼくは手を振った。

壮太は、

「瑛ちゃんこそ元気で」

そう言ってくるりと背を向けると、そのまま部屋から出て行った。

壮太たちがいなくなると、

「フロアの入り口まで見送ればよかったのに。案外二人ともお別れはあっさりしているんだね。ま、男の子ってそんなもんか」

とお母さんは言った。

お母さんは何もわかっていない。あれ以上言葉を発したら、泣きそうだったからだ。きっと壮太も同じなのだと思う。もう一言、言葉を口にしたら、あと少しでも一緒にいたら、さよならができなくなりそうだった。口や目や鼻。いろんなところがじんと熱くなるのをこらえながら、[2]ぼくは「まあね」と答えた。

壮太がいなくなったプレイルームには行く気がせずに、午後は部屋で漫画を読んだ。時々、壮太は本当に帰ったんだな、もう遊ぶことはないんだなと気づいて、ぽっかり心に穴が空いていくようだった。これ以上穴が広がったらやばい。そう思って、[3]必死で漫画に入り込もうとした。

二時過ぎからは診察があった。この前の採血の結果が知らされる。
「だいぶ血小板が増えてきたね」
先生は優しい笑顔をぼくに向けると、[4]さもビッグニュースのように、
「あと一週間か二週間で退院できそうかな」
と言った。
「よかったです。ありがとうございます」
お母さんは頭を下げた。[A]声が震えているのは本当に喜んでいるからだろう。
やっとゴールが見えてきた。ようやく外に出られる。それはうれしくてたまらない。だけど、どうしても確認したくて、
「一週間ですか？　二週間ですか？」
とぼくは聞いた。
「そこは次回の検査結果を見てからかな」
先生はそう答えた。
「はあ」
「どっちにしても一、二週間で帰れると思うよ」
先生は、「よくがんばったからね」と褒めてくれた。
一、二週間。ひとくくりにしてもらっては困る。一週間と二週間では、七日間も違うのだ。七日後にここを出られるのか、十四日間ここで過ごすのかは、まるで違う。ここでの一日がどれほど長いのかを、壮太のいない時間の退屈さを、先生は知っているのだろうか。ぼくら子どもにとっての一日を、大人の感覚で計算するのはやめてほしい。
お母さんは診察室を出た後も、何度も「よかったね」と言った。ぼくは間近に退院が迫っているのに、時期があやふやなせいか、気分は晴れなかった。明日退院できる。それなら手放しで喜べる。だけど、一週間か二週間、まだここでの日々は続くのだ。
がっかりしながらも、病室に戻る途中に西棟の入り口が見えて、[5]ぼくは自分が嫌になった。何をぜいたく言っているのだ。遅くとも二週間後にはここから出られるし、ここでだって苦しい治療を受けているわけじゃない。西棟には、何ヶ月も入院している子だっているのだ。それを思うと、胸がめちゃくちゃになる。病院の中では、自分の気持ちをどう動かすのが正解なのか、どんな感情を持つことが正しいのか、よくわからなくなってしまう。

就寝時間が近づいてくると、やっぱり気持ちが抑えきれなくなってプレイルームに向かった。真っ暗な中、音が出ないようマットに向かっておもちゃ箱をひっくり返す。三つの大きな箱の中身をぶちまけるのだ。ただそれだけの行為が、ぼくの気持ちを保ってくれた。悪いことだとはわかっている。でも、[6]こうでもしないと、ぼくの中身が崩れてしまいそうだった。いつも、翌朝にはおもちゃは片付けられ、きれいにプレイルームは整えられている。きっと、お母さんか三園さんが直してくれているのだろう。それを思うと、ひどいことをしてるよなと申し訳ない。だけど、何かしないと、おかしくなりそうで止められなかった。
三つ目のおもちゃ箱をひっくり返し、あれ、と思った。

布の箱から、がさっと何かが落ちた。硬いプラスチックのおもちゃの音とはちがう。暗い中、目を凝らしてみると、紙飛行機だ。

ぼくは慌てて電気をつけた。

壮太だ……。赤青黄緑銀金、いろんな色の折り紙で作った紙飛行機は、三十個以上はある。片手に管を刺して固定していたから、使いにくい手で折ったんだろう。形は不格好だ。それでも、紙飛行機には顔まで描かれていて、「おみそれ号」「チビチビ号」「瑛ちゃん号」「またね号」と名前まで付いている。

壮太は、知っていたんだ。ぼくが夜にプレイルームでおもちゃ箱をひっくり返していたことを。そして、壮太がいなくなった後、ぼくがどう過ごせばいいかわからなくなることも。

明日から、一つ一つ飛ばそう。三十個の紙飛行機。これを飛ばしている間、少しは時間を忘れることができそうだ。

土日の病院はしんとしていた。週末は低身長の検査の子もいないし、三園さんも休みだし、看護師さんの数も少ない。

静まり返るってこういうことだよな。ぼくは誰もいないプレイルームで紙飛行機を飛ばしたり、漫画を読んだりして過ごした。紙飛行機は似顔絵が書かれた「三園さん号」が一番よく飛んだ。

B「なんだよ、壮太。瑛ちゃん号がよく飛ぶように作ってくれたらいいのにさ」

ぼくは一人でそう笑った。

月曜日の朝には、四歳くらいの男の子が低身長の検査入院でやってきた。母親の手を握って、不安そうにプレイルームに入ってくる。

「いろいろおもちゃあるよ」

ぼくが話しかけると、ほんの少しだけ解けた顔をしてくれたけど、まだ母親の手を離さないままだ。

「そうだ、紙飛行機する？」

ぼくは箱いっぱいに詰め込んだ壮太作の紙飛行機を見せた。

「すごいね」

「だろう？　全部、顔も名前もあるんだよ」

「これ、変な顔」

男の子はおみそれ号をつかんで、少し笑った。

「こっちは『ずっこけ号』。もっと変な顔してるだろう？」

「うん」

7 男の子は「飛ばしていい？」と母親に聞く。母親がお兄ちゃんに聞いてごらんと言う前に、

「一緒にやろうよ」

とぼくは男の子に言った。

「じゃあ、ここからね。せーので飛ばそう」

「うん」

男の子が飛ばしたおみそれ号もぼくのずっこけ号も、ひょろひょろと少し飛んだだけでそのまま床に落ちた。

「だめだねー」
「本当だな。よし、じゃあ次、もっと飛びそうなの探そう」
ぼくが男の子と話していると、
「瑛介君、手紙来てるよ」
とプレイルームに入ってきた看護師さんに封筒を渡された。
「手紙？」
なんだろうと封筒を見てみると、田波壮太と書かれている。ああ、壮太だ。名前を見ただけで壮太の顔と声が一気に頭の中によみがえった。
C ぼくは男の子に「好きなだけ遊んでいいよ」と紙飛行機の箱を渡すと、大急ぎで部屋に戻った。いったい壮太は何を書いてきたのだろうか。早く読みたい、早く壮太の文字を見たいと封筒の中身を取り出して、ぼくは「うえ」と悲鳴を上げた。中からは、干からびた虫の死骸が出てきた。茶色くなってパリパリになった死骸は、不気味でしかたない。D おいおい、どんないやがらせだよと、手紙を読んでみる。

えいちゃんへ
2日間だったけど、超楽しかったよな。ありがとう。また遊べたらなーってそればっかり考えてる。
チビは最悪だけど、えいちゃんと会えたし、チビでもいいことあるなって思ったよ。
えいちゃん、「外はどれくらい暑いんだろうな」って言ってたけど、マジでやばいぜ。毎日たおれそう。
昨日おれの家の前でバッタがひからびてたから送る。な。本当に丸こげになるだろう。
壮太

ああ、壮太。ぼくもだ。もう一度遊べたらなってそればっかり考えてる。病気になってよかったことなど何もないけど、壮太と出会えたこと、それだけはラッキーだった。
それにしても、外は本当にすごい暑さなんだ。干しエビみたいに干からびたバッタの死骸はかわいそうだけど、暑さはよくわかる。いくらテレビで映像を見ても、気温を知らされてもわからなかったのに、E このバッタを見ているだけで、頭の上が熱くなって喉がカラカラになりそうだ。
ぼくはお母さんが帰ってくるのを待てず、看護師さんに言って封筒と便箋をもらった。壮太にすぐに伝えたいことがあった。
壮太といる間、何度か「小さくたっていいじゃん」そう口にしようとした。遊びを考える天才で、みんなを笑わせることができる。壮太のその力は、背の低さなんて余裕で補えてるって思ってた。でも、壮太を傷つけたらと不安で、言えなかった。
だけど、壮太は病院にいるぼくに、この夏の暑さを伝えることができる。いなくなった後も、プレイルームのぼくたちを楽しませることができる。壮太はとにかく最高なんだ。壮太が壮太なら、小さくたっていい。そう。小さくたって全然いいのだ。
干からびたバッタを横に置いて、ぼくはベッドの上の小さな机の上で手紙を書いた。
F これ以上ない暑い夏が、今、始まろうとしている。

（瀬尾まいこ『夏の体温』双葉社　二〇二二年　による）

問一　――線1「ただなんとなく笑った」とありますが、この時の「ぼく」について説明した文として最もふさわしいものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア　せっかく仲良くなれたのに、別れの場面でどんな会話をしたらよいのかよく分からず、自分の不満があらわになることを避けたいような気持ちでいる。

イ　入院生活の長い自分からするとたった三日の入院で退院していく壮太がうらやましくはあったが、それは壮太が悪いわけではないので、自分の運命をのろうしかないと思っている。

ウ　すぐ別れることになる相手と仲良くなったことを後悔したくなったものの、この思いを壮太に知られるわけにもいかないので、母たちの前もあって見栄をはっている。

エ　友だちとの別れを惜しむ気持ちが壮太との間で無言のうちに共有されたので、悲しみと反対の感情表現をすることで、悲しみがあふれ出ないようにしている。

問二　――線2「ぼくは「まあね」と答えた」とありますが、この時の「ぼく」について説明した文として最もふさわしいものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア　自分が壮太との別れをどれほど残念に思っているかが分かっていない母親の言動にはかなりがっかりしたが、あれこれ説明するのもわずらわしいと感じている。

イ　自分の思いを母親に分かってもらうことは難しい気がして、解釈を訂正してまで、どういう思いでいたのかを理解させようとする気持ちになれずにいる。

ウ　自分と壮太の仲を深く知らないお母さんが二人の思いに気付かないことはしかたがないが、もう少し二人の気持ちに配慮した発言をしてほしいと願っている。

エ　たとえ別れの場面でもあっさりした態度でいたほうが、子どものみが共有できる感覚があることを大人にはっきり知らしめることができると思っている。

問三　――線3「必死で漫画に入り込もうとした」とはどういうことですか。その説明として最もふさわしいものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア　漫画の内容に夢中になることで壮太と遊んだ楽しい時間を忘れ去り、思い出を記憶から消そうとしたということ。

イ　壮太が退院して一緒に遊べなくなることを考えないようにするために、他のことに集中しようとしたということ。

ウ　多少の無理があっても漫画のヒーローに自分を重ねることで、別れの悲しさから目をそらそうとしたということ。

エ　現実とはかなり異なる世界の人物と触れ合うことで、思いどおりにならない現実のつらさを忘れようとしたということ。

問四　――線4「さもビッグニュースのように」という「ぼく」の言葉から読み取れることとして最もふさわしいものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア　日数があいまいでも退院の目安を告げれば患者は喜ぶものだと思っている医師と、一人で過ごす入院生活の時間の流れの遅さを思って喜べずにいる「ぼく」の感覚の違いがあらわになっている。

イ　もうすぐ退院できそうだという喜ばしいニュースを伝えられることに興奮している医師に対して、「ぼく」は退院の時期が確定するまでは手放しで喜ぶわけにいかないので警戒している。

ウ　退院できる日が近づいてきて、さぞかし心待ちにしていたことであろうと一緒に喜びを分かち合いたい医師と、退院というビッグニュースに現実感を持てない「ぼく」の対照性があらわれている。

エ　医師は患者を少し驚かすことで喜ばせてあげたい気持ちをあらわにしているが、「ぼく」はそういう医師の心理作戦に気付いていて、医師の言動のあざとさに不快感を覚えている。

問五　――線5「ぼくは自分が嫌になった」とありますが、その理由として最もふさわしいものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア　退院が決まって素直に喜んでいる母親に比べて、退院できる日が明確にならないことへの不満を抱えている自分の心の狭さを思い、母親の楽天的なおおらかさがいまのぼくに欠けているものだとはっきりと感じられたから。

イ　まだまだ入院生活が続く人たちもいるなかで、自分ばかりがつらい治療を受けているように思ったり、退院が近づいているのに素直に喜べない気持ちでいたりする自分の未熟さを、他の入院患者から責められているように感じたから。

ウ　退院の時期がはっきりしていないことに不満を感じていたが、今後も続く入院生活の中で苦しい治療にたえなければならない他の患者たちと比べて、あと少し入院生活が続くだけのことに気を落としている自分の小ささを感じたから。

エ　自分はいずれ退院できるわけだが、退院できる日が来るかどうかもわからない人たちの存在に気付いたとき、個人的な喜びにひたっている自分がひどく自分勝手な振る舞いをしているように思えて、罪悪感を覚えたから。

問六　――線6「こうでもしないと、ぼくの中身が崩れてしまいそうだった」とはどういうことですか。その説明として最もふさわしいものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア　箱のおもちゃをぶちまけるという乱暴な行為が、我慢の限界を超えつつある自分に必要な行為であり、してもゆるされることだと思ったということ。

イ　プレイルーム自体にはなんの恨みもないが、室内がちらかっている状態にしておくことで混乱している自分の心に誰かが気づいてくれることを期待したということ。

ウ　いつ退院できるのかはっきりしないままの入院生活が続いていて、おもちゃにあたりでもしなければストレスの発散ができない心の状態だったということ。

エ　病院の人の手をわずらわせるよくない振る舞いだが、心が苦しいせいで体調がくずれて退院の日が延びてしまうよりは、こうしてはき出した方がよいと思ったということ。

問七　――線7のやりとりからうかがえる「ぼく」の心情の説明として最もふさわしいものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア　初対面の人の前で、自分の母親を頼(たよ)りたくなる幼い男の子の気持ちはよくわかるので、入院生活の先輩(せんぱい)としての威厳(いげん)を示そうとしている。

イ　たとえ幼い男の子であっても、一人で遊ぶよりは一緒に遊んだほうが楽しいだろうと考えて、ぜひとも彼をこの場にとどめたいと意気込んでいる。

ウ　小さい子に優しくしてあげることが、年長者である自分の度量をみせることだと考えて、男の子の緊張(きんちょう)をほぐすような声かけをしたいという気持ちでいる。

エ　壮太の紙飛行機によって元気をもらった心で男の子と向き合い、初対面の相手との会話をためらう男の子の気持ちを察して、優しく接してあげようとしている。

問八　本文の各所（……線A～F）を読んで考えたことを述べているAさん～Fさんのうち、明らかに不自然な読解をしている人物を二人選び、記号で答えなさい。

Aさん　……線A「声が震えているのは本当に喜んでいるからだろう」という表現には、母親と違って「ぼく」は心の底から喜んではいないということもうかがえるね。

Bさん　……線B「なんだよ、壮太。瑛ちゃん号がよく飛ぶように作ってくれたらいいのにさ」というのは、自分の顔のついた紙飛行機が一番よく出来ていないと気が済まないという、子ども特有の自己中心性が表現されているよ。

Cさん　……線C「ぼくは男の子に「好きなだけ遊んでいいよ」と紙飛行機の箱を渡すと、大急ぎで部屋に戻った」という表現には、紙飛行機で遊ぶことより手紙の中身を早く読みたい「ぼく」の気持ちが表れているね。

Dさん　……線D「おいおい、どんないやがらせだよと、手紙を読んでみる」は、壮太から干からびた虫の死骸を送りつけられていらだっている「ぼく」の表情が見えるようだね。

Eさん　……線E「このバッタを見ているだけで、頭の上が熱くなって喉がカラカラになりそうだ」という表現を読むと、「ぼく」が空調のきいた病室にいても外の暑さが具体的に想像できていることが分かるね。

Fさん　……線F「これ以上ない暑い夏が、今、始まろうとしている」という最後の一文を読むと、「ぼく」が壮太との別れの悲しさや入院生活でふさいだ気持ちを乗り越えて、前向きな気持ちになったことがわかるよ。

（KU5－1）

二〇二三年度

入学試験問題

国語

最初に、以下の注意事項をよく読んでください。

一、問題冊子は監督（かんとく）者の指示があるまで開いてはいけません。

二、監督者の指示により、最初に問題冊子の表紙と解答用紙の、指定されたらんに**受験番号**と**氏名**を記入してください。

三、試験問題の内容に関する質問には応じません。それ以外の用事があるときは手をあげてください。

四、受験中気分が悪くなったときは、監督者に申し出てください。

五、字数に制限のある問題では「、」や「。」などの記号も一字と数えます。

六、解答用紙は持ち帰らないでください。

受験番号
5

氏名

〔一〕次の――線部のカタカナを、漢字に改めなさい。

① しつけのゲンカクな家庭。
② 実力をハッキする。
③ シヤを広げる。
④ 作品をヒヒョウする。
⑤ 階段をふみはずしてコッセツした。
⑥ 敵のジュッチュウにおちいる。
⑦ 公園内をタンケンする。
⑧ 髪(かみ)をタバねる。

〔二〕次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

郊外住宅地は、どこかの村の一部だった場所である。しかもそれは、場合によっては村そのものを破壊してつくっており、それゆえにどうも「地域がない」、あるいは「地域が見えない」ところらしい。その郊外に今、多くの人が集住している。そのため、場合によっては「地域などいらない」という感覚をもつ人が増えてしまったようだ。昭和四〇年代（ちょうど半世紀前）は、日本社会の大きな転換期だった。それ以前とそれ以後でこの国の姿は大きく変わったのである。

地域学は、こうした住宅団地化が進む前の、五〇年前の姿を念頭において探求しつつ、これから先の地域のあり方を考えていくものになる。

さて今、郊外住宅地に暮らしている限り、人はあたかも地域に所属していないかのように書いた。もっともそう書いたのは論理をわかりやすくするためで、決して正確ではない。

例えば分譲マンションにも居住者の組合があり、コミュニティ活動がある。回覧板を回したり、共有施設を更新したり、そのための共益費を毎月集めたり……。これらも「地域」活動である。村や町内に比べれば薄っぺらに見えるが、団地もまた地域の一つであることは間違いない。

しかしまた、これから説いていくように、特にいくつかの郊外住宅地には、地域として何か不足がある。[1]それゆえ足りないものを周辺の地域に依存したり、求めたりしている。

その足りないものから考えてみよう。

例えば、年始の初詣。郊外住宅地には神社がない。先ほど地図で確認したように、この周辺にある神社は、元々の地権者である村々の産土様だけだ。

僕が住んでいる団地に近接する神社も、麓の集落のものである。元日の朝にのぞいてみると、その神社につらつらと団地の人々が坂をおりてお参りに行く。そのお参りに来る人たちを、神社の氏子である集落の人々が、お札や破魔矢、そしておみくじや甘酒を用意してまっている。ふだんからこの人たちが、清掃や備品の整備を行って維持している神社である。まわりの団地住民はいわば、必要な時だけそれを利用させてもらい、年始めの祭礼を実現しているということになる。

この地域の夏祭りや盆踊りなども、もとの村の町内会や氏子組合で企画した事業に団地住民が参加しているような格好だ。昭和期に形成された団地なら、自分たちで団地の自治会を結成していることも多かった。しかし、平成期以降に開発された郊外住宅地にはしばしば自治会がなく、団地の子どもたちが通う小中学校の運営さえ、例えば校区内のパトロールなども地権者たちの町内会活動を基盤に行われていることが多い。

そしてまた防災がそうであり、もとの集落で消防団が維持されていて、団地の人もいざとなればそうした消防力に守られている。

[2]地域がなければ暮らしは成り立たない。その地に暮らしている以上、そこには必ず地域との関わりが必要なのである。地域が見えず、関わっていないと思っている人も、そのまわりにある地域に頼って初めて暮らしは成り立っている。このことをまず、前提として考えなくてはならない。

またこういうこともある。

郊外住宅地もまた、市町村や都道府県といった地方自治体に所属する。皆さんも必ずどこかの住民になるはずだ。[3]そしてこの地方自治体もまた、地域の一つなのである。毎日の暮らしに必要な水を確保し、それを

適切に流す（上下水道）。あるいは、ごみの収集処理、学校や病院の運営から社会保障まで、地方自治体がその実際を担っている。私たちは地方自治体に所属して自らの暮らしを支え、守っている。[A]それが多くの人に意識されなくなっている。

「いやいや、ちょっとまってください。地方自治体なんて国の下請けであって、単なる行政サービス提供機関じゃないですか。私たちが税を払い、雇っている公務員が仕事をしているだけで、それを地域と呼んでいいんですか」なんていう反論がかえってくるかもしれない。まあ、皆さんがというよりも、やっぱり大人の中から。

そう。確かに町内会なら自分たちで町会費を集め、回覧板を回して互いを行き来し、清掃や夜回りを行ったり、困りごとの処理などを通じて、自分たち自身で汗をかき、お互いに支えあっている。そういう参加の仕組みをもっているからこそ地域なのだといえる。

それに対し、「ごみの処理や上下水道の整備など、何でも勝手にやってくれる地方自治体（市区町村と都道府県）はやっぱり、単なる行政サービス提供機関ではないですか」と、そういう考えも確かにわかる。

だが一見、皆さんの意志とは関係なく勝手にサービス供給を行っているようだが、実際にはやっぱり地方自治体も、そこに暮らす人々の参加があって初めて成り立っているものなのだ。[B]それは、ある面では町内会のようなものと、そう違いはないのである。

皆さんはまだ働いていないからあまり意識はしていないだろうが、多くの人は都道府県や市町村に税金を払っている。実はこれも地域への参加なのだ。「えっ？　払った税金で住民は行政サービスを買っているのでしょう？」だって。いやいやそんなことはない。

[C]こういうことだ。皆さんのこれまでの学校教育には多くの税金が使われているね。そのお金はお父さんやお母さんだけが払ったものではないよ。これまでまだ一円も税金を納めたことはない皆さんにも、そのほか色んなサービスが行われている。税を払った人だけに行政サービスがなされるのではない。税をたくさん払おうが払うまいが、その自治体に関わる人すべてに必要なサービスを行うのが自治体だ。

他方で、参加という意味では、税を払うことだけが地域への参加なのではない。[4]このことも大切だ。

先ほど見たように、町内会や神社の氏子組合や、あるいは消防団などに参加して地域に貢献をする人もいれば、専業主婦として子どもを育て、地域の子どもたちの成長を見守るお母さんたちもいる。毎朝、自宅の前の道路を掃除し、行き交う人にニコニコと声をかけるおじいさんもまた地域への参加なのだ。地域参加には色んなかたちがある。

そしてなにより県知事や市町村長、議会議員は選挙で選ぶ。投票という参加なしに僕らは議会をはじめることはできないし、行政を進めることもできない。無投票も含めて、自治体は住民たち全員の参加によって初めて成り立つ。自治体はこのように、一人一人の住民の参加なしに運営できないものなのだ。

こうして確立されている地方自治体の様々な働きによって、僕らの日々の暮らしは維持されている。首都圏の郊外住宅団地の住民にとっても、町内や集落、市役所や都道府県庁こそが、暮らしを守る砦なのであり、僕らはこうした地域に様々なかたちで関わり、また守ってもらうことで自分の暮らしはあるわけだ。

どうだろう。少しでも自分と地域との関わりに気づくことができただろうか。

意識していなくても、人は必ず地域のうちにある。だが、それがどうも見えなくなってきている。なかなか地域が見出しにくい中で、地域とは何かをどう捉え、見出し、学んでいけばよいのだろうか。

ここまで地域について何の定義もせずに書き進んできた。ここで「地域とは何か」について説明すること

にしよう。

「地域」を辞書で引くと、こう説明されている。

「地形や行政管轄などの観点から、なんらかの意味でひとまとまりのものとして他と区別される土地。「―的・―性・―別」」（『新明解国語辞典』三省堂）、「区切られた土地。土地の区域。「―の代表」」（『広辞苑』岩波書店）、「土地の区域。区画された、ある範囲の土地」（『精選版　日本国語大辞典』小学館）等。

いずれの説明も、ただ一定の空間のことを指して「地域」という概念を考えているようだ。まあ、それが地域の一般的な捉え方なのだろうし、皆さんもきっとそうなのだと思う。

しかし、漢和辞典で「地」や「域」の字の由来をたずねてみると、異なる意味が加わってくる。先に「域」の方から見ていきたい。

「域」のつくりの「或」。これを分解すると、「戈」「口」「一」となる。「戈」をもった人々（「口」）が、境界（「一」）を守っているという意味なんだそうだ（『大漢語林』大修館書店）。「或」を四角く取り囲めば「國」となり、これは「国」と同義である。要するに「域」には、一定の空間にとどまらず、その空間をそこに暮らす人々が守っている、そういう意味がこめられている。

どうだろう。「域」はどうも、単なる空間ではないね。その空間を守っている人々、参加している人、そこにある集団をふくめた言葉のようだ。

では地域の「地」とは何だろう。「地」は、「土」偏に「也」。この「也」は蛇のことで、土地がうねうねとうねっている様を指すのだという（同右）。

つまり「地域」とは、ある人々（集団）が土地を占有し、自分たちのものだと主張していることである。一定の土地を守り、暮らしを立てている、そういう人間集団のことになる。

だがまてよ。それでは「国（國）」との違いが明瞭ではない。国だって同様に、国民が国土を占有し、守って暮らしていることに変わりはないのだから。

5 そこで今度は「地」についてもう少し考えてみることにしよう。辞書をたぐってみると、「地」にはもう一つ、別の使われ方があることがわかる。

「地」は、単に土地というだけではない。「地」には、「下地」とか、「地肌」とか、そういう使い方がある。表に現れているものの下で、基礎となっているものを示す言葉だ。日本の伝統芸能で、踊りの伴奏を「地方」とか、「地謡」とかいうのも同じである。「地が出る」「地でいく」などともいう。「農地」「宅地」「借地」などは、そうした「地」が何かに使われて、一定の特徴が現れたことを指している。「地域」とは、ある「地」をある集団が他の集団を排して占有し、自分たちの「域」にした状態を指すものと理解できそうだ。

すると問題はこうなる。そうした「地」を用意し、その一部を「地域」にする条件をつくっているものとは何かということだ。それぞれの地域がそれぞれに土地を占有し、しかも互いに両立し共存する、その基礎を担っているものとは……。

それこそが国なのである。国家の領する土地があり、そのうちの一部の土地の占有を特定の「域」（集団）に認めることによって地域は立ち現れる。国家があり、その国土（領土）を分割して、それぞれの集団が占有している状態が「地域」だ。

地域とはだから、国の一部なのである。それは国の中の小さな国である。地域が地域自身の力でその占有を実現しているのではなく、その前に国家がその外の国々から全体の土地を占有し守っているので、地域に

よる占有も可能になっているというわけなのだ。

国家は固有の領土をもつが、国家はさらにその下にある地方自治体にその土地を分割して統治を行っている。というよりも、そうやって地域に分割することで、国家による国民の統治は初めて可能なのである。

（山下祐介『地域学をはじめよう』岩波書店　二〇二〇年　による）

問一　――線1「いくつかの郊外住宅地には、地域として何か不足がある」とありますが、筆者が不足している例として挙げているものにあてはまらないものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　上下水道の整備やゴミの収集処理　　イ　小中学校の学区内のパトロール

ウ　消防団をはじめとした防災組織　　エ　初詣等に用いる神社の清掃や維持・管理

問二　――線2「地域がなければ暮らしは成り立たない」とありますが、筆者がこのように述べる理由として最もふさわしいものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア　人は一つの地域に所属することによって、他の地域からの圧力や干渉から守られ、平穏な日々を過ごすことができるから。

イ　人は地域に所属しないと他者との交流が断絶し、食品の購入や公共交通機関の利用など、人としての最低限度の生活を送ることさえも難しくなるから。

ウ　人は生活のすべてを自分だけで完結させることは難しく、他者と直接・間接を問わず関わりを持ち、お互いに助け合うことによって生活しているから。

エ　人は、特定のコミュニティの中で生活し、他者との直接的な関わりを持つことによってはじめて自己を認識することができるから。

問三　――線3「この地方自治体もまた、地域の一つなのである」とありますが、なぜ地方自治体のことを「地域」と呼べるのですか。その理由として最もふさわしいものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア　地方自治体は、こちら側が求めていなくてもサービスの提供や設備の維持・管理をしてくれるという認識が一般的だが、地域と呼ばれる団地の神社なども地方自治体同様の運営がされていて、必要なときには自由に利用できるから。

イ　地方自治体の仕事は、私たちが必要としたときにサービスを提供してその対価をもらっているにすぎないという認識が一般的だが、税金という形でお金を集めることでサービスを提供でき、また、選挙によって議会が運営できる等、地方自治体の運営には人々の参加が不可欠であるから。

ウ　地方自治体と私たちの関係性は、私たちが納税という義務を行い、それに応じて自治体がサービスを提供するという認識が一般的だが、地域と呼ばれる町内会や自治会も同様に、会費を支払わなければ地域に関する情報の提供や安全管理をしてくれないから。

エ　地方自治体は、戸籍や住民票などのために区切られた制度上の境界という認識が一般的だが、町内会や地域の自治会などの集合体が地方自治体であるため、地方自治体との関わりを持たなければ、町内会などに参加することを認めてもらえないから。

問四　A ～ C に入る言葉の組み合わせとして最もふさわしいものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア　A　確かに　　B　また　　C　あるいは
イ　A　そして　　B　さて　　C　つまり
ウ　A　ところが　　B　そして　　C　例えば
エ　A　あるいは　　B　つまり　　C　しかし

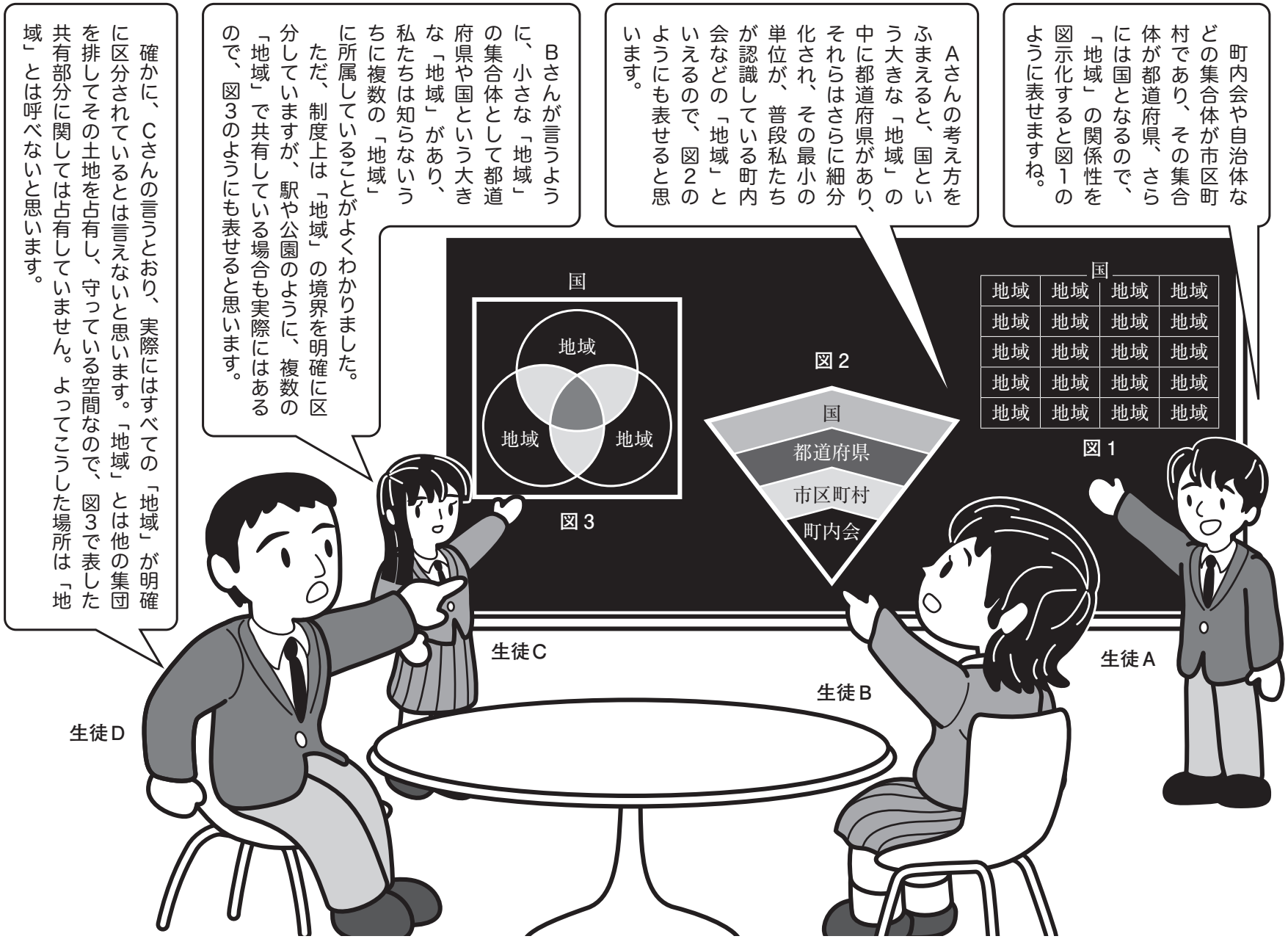
問五　――線4「このことも大切だ」とありますが、どういうことですか。筆者が挙げている二つの事柄に触れながら、一文で説明しなさい。

〈下書き欄〉

問六　――線5「今度は『地』についてもう少し考えてみることにしよう」とありますが、次の「地」を含む言葉のうち、「表に現れているものの下で、基礎となっているものを示す言葉」にあてはまるものを次のア～オの中から二つ選び、記号で答えなさい。

ア　地主　　イ　地力　　ウ　墓地　　エ　基地　　オ　生地

問七　この文章を読んで、生徒たちが話し合いを行いました。文章から考えられることとしてふさわしくない発言をしている生徒をA～Dの中から一人選び、記号で答えなさい。



〔三〕次の文章は梨木香歩『りかさん』の一節である。小学生の「ようこ」は、「おばあちゃん」（麻子さん）から贈られた日本人形「りかさん」の声が聞こえる。ある日、道で桜の老木の枝にひっかかったようこは、老木がすがりついてくる老婆に見えたことで恐怖にかられ、枝をふりはらって逃げた。数日後、ようこは友人の家で、持ち主に捨てられた悲しみにとらわれている西洋人形「アビゲイル」の魂を、りかさんに教わった「かわいいという気持ちを心に拡げながら抱きしめてあげる」方法で解放した。これに続く文章を読んで、後の問いに答えなさい。

次の日、おばあちゃんの家から帰るとき、ようこは一つ決心していた。

桜の老木を許してやるのだ。

直感だが、きっと、あの老木だって、アビゲイルに匹敵するぐらいの物語があるに違いない。抱きしめて、それからあのときりかさんに教わったパワーで包んであげる。

だから、その角を曲がるときまではとても意気込んでいた。

が、角を曲がったとき、ようこは目を疑った。

老木があった場所がすっかり空っぽになっている。無惨に切り残された葉をつけたままの細い枝があちらこちらに散らばり、その清冽な香りが、伐採がついさっきおこなわれたことを物語っていた。

ようこが呆然と突っ立っていると、りかさんが、

—中がだいぶ腐ってましたからね、専門家が見て、道路脇にこのまま放置しておくのは危ないってことになったんでしょう……。

と、慰めるように言った。

「でも、私……」

ようこは憤りとも悲しみともつかない、やり場のない思いに思わずこぶしを握った。

「あの桜のこと、まだなにも知らないのに……」

—落ちた枝を集めて。

りかさんが優しく囁いた。

—たくさん集めて。それを煎じて色を出しましょう。ようこちゃん、そういうの、好きでしょう。それから麻子さんに絹の反物少しもらって。染めましょう、それで私の着物をこしらえてもらう。私が桜の着物をいつも着るよ。

「でも、私は」

1 もっとやろうと思ったことがあったんだ。ようこはそう叫びたかった。

—ご供養だよ。

りかさんは静かに言った。

ようこはしかたなく、落ちている分の枝だけ集めて両手に抱えるようにしてもう一度バスに乗り、おばあちゃんの家に向かった。

帰ったはずのようこが、すっかり意気消沈して、しかも枝をいっぱい抱えて戻って来たので、おばあちゃんは驚いた。

「どうしたんだい。かちかち山の狸みたように」
そこでりかさんがこれまでのいきさつを語ると、おばあちゃんはとても同情した。
「よし、じゃあ、りかの言うとおりそれを煎じようじゃないか。茄子漬けに使った焼きみょうばんがあったから、あれを媒染にしよう。反物とか、鍋とか、準備するから、ようこはその枝をこのはさみと小刀で細かく刻んでおいで」
と言って、はさみと古新聞を渡された。
もうこうなったら行きがかり上しようがないので、ようこはのろのろと広縁に古新聞をひろげた。
そして桜の枝を一本つかんだ。
ざらざらして、堅い。
でもじっとつかんでいると温かみが伝わって来る気がする。
その温かみは微かに残っている感じのもので、すぐにも消えそうなのだった。切られる前だったら、その温かみは波のように桜の樹の芯から打ち寄せて来たのかもしれない。ようこにそれを感じる用意があったら。
……逃げよう逃げようとしていたから、こういうことも分からなかったんだ。
ようこは自分を責める。
「りかさん、はさみ入れられないよ、かわいそうで」
ようこはりかさんに訴えた。
—ご供養だから。そのままでも朽ちて行くだけだから。桜に最後のチャンスだから。
そう言われて、ようこは作業を始めた。
細い枝はぱちんぱちんと切り、少し太めのものは小刀で削るようにした。
なにしろ子どものようこが両手でかかえるくらいの量の枝だから、それほど多いわけでもない。
おばあちゃんが途中で加わって、あらかた、めどはついた。
「よし、できたね。少ないけれど、りかの分の着尺ぐらいはあるだろう」
大鍋に細かくした桜と水を入れ、火にかける。やがてぐらぐらと煮立って来る。おばあちゃんが菜箸でゆっくりかきまわす。
「ようこもやるかい」
「……うん」
最初はあまり積極的でなかったようこも、お湯がぐつぐつとあぶくを出して煮立ってくる様子に、なにかが始まりそうな予感を感じ興味を引かれた。
透明だったお湯が、気づけばずいぶん黄色がかっていて、あれ、と思うまに茶褐色のようになる。つぎからつぎへと一瞬一瞬、微妙に色を変えて行く。目が離せない。
……まるで桜が、いっしょうけんめい自分の物語を話そうとしているみたいだ。
ようこはいつのまにか真剣に色の変化に向き合っていた。
やがて染液はしだいに赤みを帯びて来る。だがまだまだ渋い、褐色の入った色だ。
「もういいころだね」
おばあちゃんはそう言って、縮緬の白生地を沸騰している鍋に入れた。
雪のように白く輝くばかりだった縮緬が、あっと言うまに茶褐色の液体に染まった。長い年月の桜の

※呻吟がそこに凝っているようで、[2]ようこはしんみりとした。
「しばらくそうやって菜箸でかきまわしておいで。私は媒染液をつくって来るから」
そう言っておばあちゃんは後ろのほうでバケツに水を入れたり、なにかを混ぜたりしていた。
この桜はきっとこの濁った色のようにさまざまな苦労を背負って生きて来たのだろう。
いいかげん、ようこの腕も疲れて来たとき、
「いいよ、その縮緬を上げてこっちのバケツに移して」
と言われたので、ようこは言われたとおりにした。滴がぽたぽた落ちるのはしようがない。
「じゃあ。上下よくひっくり返して」
ひっくり返すために一度菜箸で液から上げたとき、ようこは「あ」と声を上げた。
縮緬がそれこそあっと言うまに、茶褐色から赤褐色、赤紫がかった濃い赤へ、みるみる鮮やかに変化して行ったのだ。
「すごい」
ようこは目を輝かせた。
「へえ。以前に時々桜を染めたことはあったけどね、こんなのは初めてだね。染めはおもしろいね。ほんとに、同じ種類の木でも一本一本、出す色が違う。しばらく浸けておいて、休憩しよう」
おばあちゃんは水屋を開けて、お茶の支度を始めた。
「私はいいよ、こうやって見ている」
[3]「そうかい」
おばあちゃんは軽く言って、熱心にバケツにかがみ込むようにしているようこの姿をおもしろそうに見ていた。

縮緬はしばらくしてからもう一度染液で煮沸され、水洗いされて軒下の竿に干された。
三人――りかさんも――は、広縁でぼんやりそれを見つめている。
「色がだいぶ、薄くなったねえ」
「染液の中にあるときは濃く見えるね」
おばあちゃんはうなずいた。
「きっと、きれいな淡紅梅になるよ。桜なのにね。しかもこの時期に。ちょっと変わってたね」
「おばあちゃん、どうして染めのこと、こんなによく知っているの」
「教師を辞めたころ、しばらくこういうことに興味を持ってたんだよ」
「そうか……」
と、ようこはうなずいて、それなら、と言わんばかりに、
「おばあちゃん、こうやって植物で染めたのと、普通のTシャツとかの色とは、随分違うよねえ。どうして？」
「それは化学染料と植物染料の違いだ。化学染料の場合は単純にその色素だけを狙って作るんだけれど、植物のときは、媒染をかけてようやく色を出すだろう。頼んで素性を話して貰うように。そうすると、どうしても、アクが出るんだ。自分を出そうとするとアクが出る、それは仕方がないんだよ。だから植物染料は

どんな色でも少し、悲しげだ。少し、灰色が入っているんだ。一つのものを他から見極めようとすると、どうしてもそこで差別ということが起きる。この差別にも澄んだものと濁りのあるものがあって、ようこ」

おばあちゃんは、何だか怖いぐらいにようこをじっと見た。

「おまえは、ようこ、澄んだ差別をして、ものごとに区別をつけて行かなくてはならないよ」

おばあちゃんの様子で、ようこはよく分からない言葉でも心に刻んでおかなければならないものがある、と感じている。

「どうしたらいいの」

「簡単さ。まず、自分の濁りを押しつけない。それからどんな『差』や違いでも、なんて、かわいい、ってまず思うのさ」

ああ、とようこはアビゲイルのことを思い出した。でもあのときのことはあまりにも重く大切で、今はまだ、簡単に言葉にしたくなかった。それで、そのことに焦点を合わせながら、直接それに触れないような言葉を自然に選んだ。ようこの人生で、言葉と感覚の、そのような微妙な操作が行われたのは、このときが初めてのことだった。

「そうしたら、『アク』は悲しくなくなるの」[4]

「ああ」

おばあちゃんは遠い目をした。おばあちゃんは、ようこが自分で知らずに行った、この「離れ技」に気づいていた。けれど、それでも悲しそうだった。

「それは仕方がないんだよ。アクは悲しいもんなんだ。そういうもんなんだ」

そう言われると、ようこまで悲しくなる。けれど、それは本当のことだと、ようこの中の何かが納得する。

ようこは黙り込んでしまい、それがおばあちゃんの目にも少し悲しげに見えたのだろう、おばあちゃんは、

「ようこはもうすぐ、理科で『昇華』という言葉を習うと思うけど」[5]

と、優しくゆっくり話しかけた。

「ようこがそうやって、頭でなく言葉でなく、納得して行く感じは、そういう『悲しいもの』が『昇華に至る道筋』をつけるんだよ。難しいね。でも、本当は簡単なことだ。簡単なことほど、言葉で言おうとすると難しくなる」

ようこは、おばあちゃんの話すことが全部「分かった」わけではなかった。けれど、おばあちゃんの、ようこを気遣う優しさがようこを力づけた。

「私、おばあちゃん、でも、ぜったい化学染料より植物染料の方が好き」

「悲しくても?」

おばあちゃんはほほえんで訊いた。

「悲しくても!」

ようこははっきり答えた。

おばあちゃんは、不意に浮かんだ涙を、ようこに気取られないように庭を見つめた。

「人形にも樹にも人にも、みんなそれぞれの物語があるんだねえ、おばあちゃん」

ようこはしみじみと呟いた。[II]

「そうだね。哀しい話も、楽しい話もあるね」

「媒染を変えたら、出てくる物語も違うんだろうか」
「おまえの心持ちによっても変わるだろうよ」
「え？」
―ようこちゃんは媒染剤みたいな人になれるよ。

6 りかさんは少し低い、けれどどこか嬉しそうな声で言った。
「じゃあ、いい色を出す媒染になりたいなあ。私、草木の、いろんな話が聞きたいなあ」
ようこは芽吹いたばかりの庭の柿の木の若葉を見ながら言った。
「そうか」
と、おばあちゃんは目を細めた。
生け垣の向こうからさっと一陣の風が吹き、若葉は白い葉裏をみせ、淡紅梅の縮緬はくるりと翻った。
―いい風。
と、りかさんは呟いた。

（梨木香歩『りかさん』新潮社　二〇〇三年　による）

※　呻吟…苦しんで呻くこと。

問一　〰〰線Ⅰ・Ⅱの意味として最もふさわしいものを、次のア～エの中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

Ⅰ　呆然と
ア　怒りが絶え間なくこみあげてきて　　イ　驚きのあまり言葉を失って
ウ　やる気が起きずぼんやりとして　　エ　泣きそうになるのをこらえて

Ⅱ　しみじみと
ア　心の底から感じ入ったように　　イ　幼子に言って聞かせるように
ウ　ふさいだ心を解き放つように　　エ　何もかもを理解したように

問二　――線1「もっとやろうと思ったことがあったんだ。ようこはそう叫びたかった」について、この時のようこの気持ちを説明した文として最もふさわしいものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。
ア　桜の老木も、アビゲイルのように自分の手で成仏させようと思っていたので、いつの間にか伐採されるという別れ方は納得がいかず、時間を過去へ巻きもどしたい気持ちになっている。
イ　桜の老木が抱えているであろう辛い過去の記憶を受け止めていやしてあげようと思っていたが、知らぬ間に伐採されてしまったことでできなくなり、やるせない気持ちになっている。
ウ　桜の老木がいつか伐採されるだろうと思っても気にしていなかったが、伐採された今は、老木のもつ辛い記憶に向き合ってあげられなかった自分を反省したい気持ちになっている。
エ　桜の老木が伐採されてしまうとは夢にも思わなかったが、今ふり返ってみると、もっと早く老木と向き合う勇気が出せていたら伐採を止められただろうと後悔する気持ちになっている。

問三　――線2「ようこはしんみりとした」について、ようこがこういう気持ちになったのはなぜですか。説明として最もふさわしいものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア　染めに気を取られて忘れていた桜の老木を救えなかった悲しみを、また思い出したから。
イ　縮緬が枝と同じ茶褐色に染まったのを見て、桜の老木の魂が救われたような気がしたから。
ウ　煮出した桜の老木から出てきた濁った色から、老木が背負ってきた苦しみを想像したから。
エ　桜の老木が語る物語に集中するあまり、老木が抱えてきた感情に飲みこまれてしまったから。

問四　――線3「そうかい」とありますが、この時のおばあちゃんについて説明した文として最もふさわしいものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア　桜の老木を供養するという理由を与(あた)えることでようこの気をまぎらわせようとしたら、ようこが思いのほか染液の色の変化に興味を持ったので、思いつきが功を奏したと感じている。
イ　教師を辞めた後に染めに興味を持った自分よりもはるかに早く染めの魅力(みりょく)に気づいたようこの成長の早さを見て、自分がようこにしてやれることが残り少ないことを悟(さと)っている。
ウ　急に媒染に興味を示しだしたようこの気分屋な性格にあきれると同時に、何を考えているのかわからないようこの底知れなさに感服し、しばらく様子を見た方がよいと判断している。
エ　桜の枝が出す色の変化を見逃(みのが)すまいとするようこの姿を見て、桜の老木が伐採されてしまったことを悲しむことしかできなかった少し前の姿から変化しつつあるのを感じ取っている。

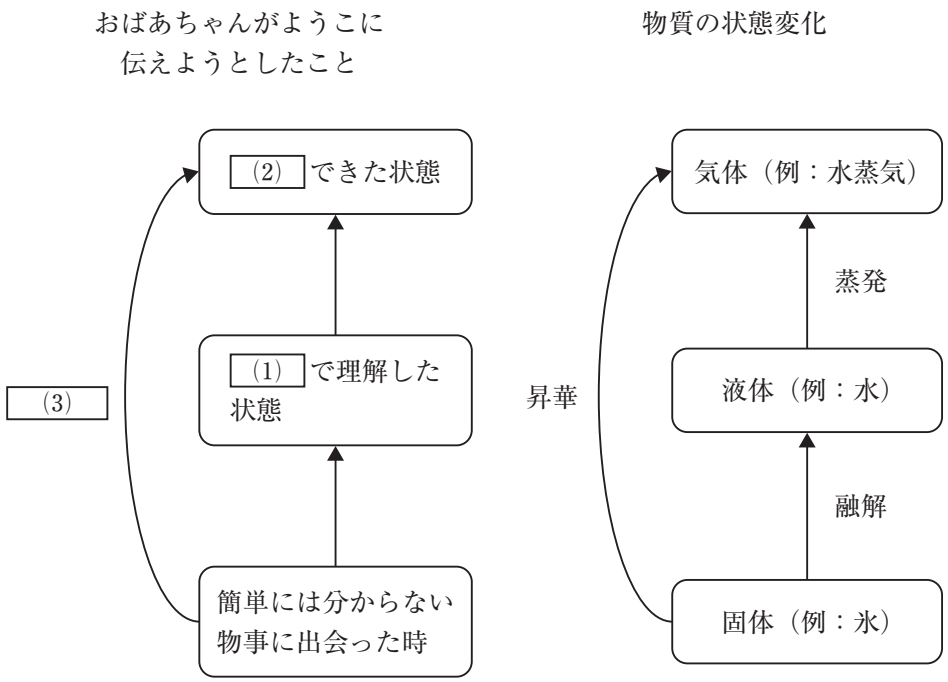
問五　――線4「そうしたら、『アク』は悲しくなくなるの」の言い換(か)えとして最もふさわしいものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア　相手に受けとめがたい要素があったとしても、それも相手の一部分だと思ってそのまま受けとめようとすれば、かけがえのないものとして受けとめられるようになるの？
イ　相手が救いを求めて自分にせまってきたとしても、助けることが相手のためになるかどうかを適切に判断できるようになれば、負の感情を引き受けすぎないで生きていけるの？
ウ　相手のもっている素性が一見すると悲しげに思えるものであったとしても、相手の立場に立って理解しようとすれば、楽しいものに思えてきて受け入れられるようになるの？
エ　他者の心を濁らせてしまう性質の持ち主だったとしても、差別せずにいっしょにいてあげれば、相手の過去を理解していっしょに乗り越(こ)えてあげられる人になれるの？

問六　――線5「『昇華』という言葉」について、「昇華」とは、中学一年生の理科で学習する「物質の状態変化」の一種で、固体が液体という状態を飛びこえて一気に気体になることです。これをふまえて、おばあちゃんが「『昇華』という言葉」を用いてようこに伝えようとしたことを表した【図】の(1)～(3)に当てはまる言葉を、次の指示にしたがってそれぞれ答えなさい。

(1)　本文中の言葉を用いて四字　(2)　本文中から抜き出して二字　(3)　自分の言葉で十字以内

【図】



問七　――線6「りかさんは少し低い、けれどどこか嬉しそうな声で言った」とありますが、りかさんはどのような気持ちになっているか。一文で説明しなさい。

〈下書き欄〉

（KU7－1）

二〇二三年度

入学試験問題

国語

最初に、以下の注意事項をよく読んでください。

一、問題冊子は監督（かんとく）者の指示があるまで開いてはいけません。

二、監督者の指示により、最初に問題冊子の表紙と解答用紙の、指定されたらんに**受験番号**と**氏名**を記入してください。

三、試験問題の内容に関する質問には応じません。それ以外の用事があるときは手をあげてください。

四、受験中気分が悪くなったときは、監督者に申し出てください。

五、字数に制限のある問題では「、」や「。」などの記号も一字と数えます。

六、解答用紙は持ち帰らないでください。

受験番号
7

氏名

〔一〕次の――線部のカタカナを、漢字に改めなさい。

① 日本の小麦は大部分がユニュウ品だ。
② 政財界にクンリンする。
③ 通帳でヨキン残高を確認する。
④ ケンポウ改正について議論する。
⑤ 珍(めずら)しい現象にキョウミを引かれる。
⑥ ミンシュウを前に演説をする。
⑦ ヴァイオリンのエンソウを聴(き)く。
⑧ 本番に向けて英気をヤシナう。

〔二〕次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

もちろん科学は、非常に力強いものではあるが、科学が力強いというのは、ある限界の中での話であって、その限界の外では、案外に無力なものであることを、つい忘れがちになっている。[1]いわゆる科学万能的なものの考え方が、この頃の風潮になっているが、それには、科学の成果に幻惑されている点が、かなりあるように思われる。これは何も人生問題というような高尚な話ではなく、自然現象においても、必ずしもすべての問題が、科学で解決できるとは限らないのである。今日の科学の進歩は、いろいろな自然現象の中から、今日の科学に適した問題を抜き出して、それを解決していると見た方が妥当である。もっとくわしくいえば、現代の科学の方法が、その実態を調べるのに非常に有利であるもの、すなわち自然現象の中のそういう特殊な面が、科学によって開発されているのである。

それはどういう面かというに、まず第一に、一番重大な点をあげれば、科学は再現の可能な問題、英語でリプロデューシブルといわれている問題が、その対象となっている。もう一度くり返して、やってみることができるという、そういう問題についてのみ、科学は成り立つものなのである。

なぜ再現可能の問題だけしか、科学は取り扱い得ないかといえば、科学というものは、あることをいう場合に、それがほんとうか、ほんとうでないかということをいう学問である。それが美しいとか、善いとか悪いとかいうことは、決していわないし、またいうこともできないものである。

それでは科学で、ほんとうであるというのは、どういうことかということを、まず考えてみる必要がある。ごく簡単な場合についていえば、いろいろな人が同じことを調べてみて、それがいつでも同じ結果になる場合には、それをほんとうというのである。[①]同じことを同じ方法で調べることができない場合もある。しかし人間が自然界を見る時には、いつでも人間の感覚を通じて見るわけであるが、この感覚を通じて自然界を見ることによって、ある知識を得る。その得た知識と、ほかの人がその人の感覚を通じて得た知識との間に、互いに矛盾がない場合には、われわれはそれをほんとうであるという。そうでない場合には、それはまちがっているというわけである。

感覚を通じて自然界を認識するといったが、その中で一番簡単なものは、いわゆる測定である。ものを測るというのは、どういうことであるか。そのくわしいことは、第三章で更に述べるが、ここでは簡単な場合だけについて考えよう。ものを測るということは、測ろうとするものと同じ種類のもので、ある一定の量のものをとって、その量と比べてみることである。この一定量を単位というが、目的とするものが、この単位の何倍あるかを調べることが測定である。[②]これが科学の一つの特徴である。これを反面からいえば、自然現象の中から、数値であらわされる性質を抜き出して、その性質を調べるという方向に、科学は向っていることになる。自然現象をただあるがままに見ただけでは、[③]のつけようがない。それでいろいろな方法によって、得られた多くの知識を整理していくのであるが、そのうち一番簡単なものが測定なのである。自然現象を数値であらわして、その数値について、知識を深めていく。これが科学の基礎となっている方法である。

この方法について、検討してみるために、そのうちでも一番簡単な場合、すなわち「ものの長さを測る」という問題について考えてみよう。今あるものの長さを測った場合に、ある単位とくらべてみて、何倍あったかという数値が得られたとする。その価がほんとうかどうかということは、誰がそのものについて、同

じ方法で測ってみても、いつでも同じ価が出るかどうかということである。それで測定という、自然科学における一番基本的で単純な操作は、何べんでもくり返して測ってみることができるということを、はじめから仮定しているのである。すなわち再現可能の原則を、はじめから仮定しているわけである。

一番分りやすい例として、次のような特殊な場合を考えてみよう。世界中に物差が一本しかなくて、その物差は、一度ものを測ると、こわれてしまう性質のものだとする。[2]そういう物差で、ものを測ったときに、どれだけの長さがあったとか、どれだけの量があったとかいっても、それは全く意味がない。別に精度がどうであるとか、あるいは不確かだとかいう問題ではなくて、そういうもので測った価というものは、原理的にいって、科学の対象にはならないものである。科学という学問は、そういうものにはタッチしない学問なのである。というのは、そういう価がほんとうであるかまちがっているかということは、原理的にいえないからである。何べんでもくり返して調べることができ、そしていつでも、また誰が測っても、同じ価が出る場合に、それをほんとうであるというのであるから、このような再現不可能の問題は、科学では取り扱い得ないのである。

（中略）

現在のいろいろな自然科学の問題について、大勢の学者が、あらゆる方面で研究をしていて、いろいろな結果が発表されている。ああいうものを、一々もう一度同じ条件でくり返してみるということは、実際上は不可能なことである。また誰もそういうことはやっていない。ちゃんとした研究をして、こういうことをやったら、こういう結果が出たと論文に発表する。そういう論文を読んだ時、いかにもその通りだ、なるほど、自分もあの装置を用いて、同じことをやったならば、このとおりの結果が出るだろうと信用する。実際問題としては、それより仕方がないわけである。こういうふうに、再現可能と信用できるということが、再現可能な問題なのである。

ここで、信用するということは、どういうことか、はっきりさせておく必要がある。ある人が、ある問題について得た知識が、今までわれわれの知っていたほかの知識に当てはめてみた時に、従来の認識との間に、矛盾がないとする。矛盾がなければ、いかにもそれはそうであろうと信用することができる。科学の世界にも、信用という言葉があるが、これは道徳の方でいう信用とはちがう。互いの知識の間に矛盾がないという意味である。

（中略）

幽霊の問題を取り上げてみよう。幽霊は科学の対象になるか、といえば、誰でも一言の下に、否というであろう。そして現在の科学では、幽霊は対象として取り上げられていない。しかし昔は大勢の人たちが、幽霊を見たといっているし、またそういう記録もたくさんある。もっとも心霊論者は、今日でも幽霊の存在を信じていて、いろいろとその証拠を出している。昔の人はおそらくほとんどの人が、幽霊は実在するものと信じていたであろう。それでは多くの人が幽霊を見たからという理由で、これは再現可能であるといえるか。少くともその時代としては、科学の対象となり得たものであったかというと、それはなり得なかったものである。ということは、今までいってきたように、再現可能というのは、必要な場合に、必要な手段をとったならば、再びそれを出現させることができるという確信が得られることなのである。幽霊はそれを再現させる方法について、確信が得られない。(注)希土元素のようなものは、めったに見られないし、またほとんどの人が一生見ることがないものであるが、今日の科学の示す学理に従って、こういう順序を経たならば見

ることができる、という確信がもてる。幽霊はいくら大勢の人が見たにしても、どういう手段を用い、どういうことをしたならば、必要な時に必要なところで幽霊を見ることができるか、あるいはどういう条件の時ならば、見えるはずだという確信をもつことができない。すなわち幽霊というものは、現在の科学が自然界についてもっている認識とは、性質の異るものである。それで[3]幽霊は科学の対象にはならないのである。

今まで例にあげた彗星の運動とか、あるいは化学の希土元素とかいうようなものは、われわれの日常生活からは縁の遠いものであるが、これらは生命のない物質であるから、まだ話は簡単である。もう少し複雑な問題になって、たとえば人体の生理とか、医学とかというものになると、[4]話はもっと面倒になる。これらももちろん科学であるが、こういう方面の科学になると、再現可能という問題が、非常にむつかしくなる。たとえばある薬がある病気に効く、というような一番簡単そうに見える事柄でも、考えてみるとなかなかむつかしい問題である。ある人が、ある薬を飲んだときに、病気が治ったら、その薬は効いた、とそう簡単にいってしまうことはできない。というのは、飲まなくても治ったかもしれないからである。しかし飲んでしまったのであるから、飲まなかった場合と比較することはできない。それである薬が効くとか効かないとかいうことは、全然同じ体質の人が二人いて、同じ病気になって、一方は飲んで治り、一方は飲まなくて治らなかったという場合でないと、薬が効いたかどうかを、確かめることができないはずである。しかしそういう実験をしてみようとしても、同じ条件の人が二人いることはないから、確かめてみることができない。それで、それは偶然に治ったのだと、あくまでも言い張られたら、いわゆるきめ手がないのである。

それでは、一人の熱のある病人が、ある薬を飲んだら熱が下った、次の日飲まなかったら熱が出た、また次の日飲んだら下った、というふうに、何回もくり返してみて、その度毎に熱が下ったら、その薬が効いたといっていいであろうといわれるかもしれない。しかし厳密にいえば、病人の身体は、一日毎に変化しているので、同じ条件で何回もくり返したのではない。それで再現可能の原則は、[④]にしか成り立っていないのである。

（中谷宇吉郎『科学の方法』岩波書店　一九五八年　による　一部原文表記を改めている）

（注）希土元素……元素の一種。化学では、成りたちや構造の最も簡単な成分のことを元素という。

問一　――線1「いわゆる科学万能的なものの考え方」とありますが、このような考え方にとらわれている人が見落としていることとして最もふさわしいものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア　今日の科学が、特にいろいろな自然現象を調べるのに非常に有利なものであること。
イ　今日の科学が、人生に関わる問題は全く解決することができないものであること。
ウ　今日の科学が、科学の方法にふさわしい問題を解決するにとどまるものであること。
エ　今日の科学が、科学のもつ力強さから問題を解決することで進歩してきたこと。

問二　[①]にあてはまる言葉として最もふさわしいものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア　つまり　　イ　それでは　　ウ　たとえば　　エ　もっとも

問三 ［　②　］には次のア～エの文が全て入ります。二番目に入るものとして最もふさわしいものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア　しかし、何倍という以上、これは数値でもってあらわされる。

イ　自然現象を数値であらわして、数学を使って知識を総合していく。

ウ　この数値であらわされるということが、大切な点であって、いったん数値になれば、これに数学を使うことができる。

エ　「何倍」というのは、もちろん整数である必要はなく、コンマが幾つついていてもかまわない。

問四 ［③］には体の一部を表す漢字一字が入ります。最もふさわしいものを書きなさい。

問五 ――線2「そういう物差で、ものを測ったときに、どれだけの長さがあったとか、どれだけの量があったとかいっても、それは全く意味がない」とありますが、この理由を説明したものして最もふさわしいものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア　「物差」の使い方を知っていても、長さや量の概念をもっていないと、実際には扱えないから。

イ　使うとこわれてしまう「物差」は、最初に測ったもの以外のものを測ることが出来ないから。

ウ　世界中に一本しかない「物差」は、一般的な物差と同じ目盛りで作られていないから。

エ　一本しかない「物差」では、その「物差」一本分以上の長さや量を量ることができないから。

問六 ――線3「幽霊は科学の対象にはならない」とありますが、この理由を一文でわかりやすく説明しなさい。

問七 ――線4「話はもっと面倒になる」とありますが、この理由を説明したものして最もふさわしいものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア　生命に関わる領域は、特定の状態に固定して観測することが難しいため、科学の領域に含めることができないと考えられるから。

イ　筆者にとって、生命に関わる領域は、希土元素といったものを扱う学問領域ほど詳しくないと考えられるから。

ウ　日常生活からそう縁の遠くない、生命に関わる領域では、関心を持つ人が多いために厳密なことを強く求める人が必然的に増えると考えられるから。

エ　生命に関わる領域では、希土元素といったものをあつかう学問領域に比べて、同じ事象を確認するために条件を整えることが現実的に不可能だと考えられるから。

問八 ［④］にあてはまる言葉として最もふさわしいものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア　対照的　　イ　総合的　　ウ　近似的　　エ　絶対的

問九　本文を読んだ生徒ア～エの四人が感想を語り合いました。このうち、明らかに誤った本文の読解をしている人をア～エの中から選び、記号で答えなさい。

生徒ア　本文では「測定」が「感覚を通じて自然界を認識する」ことの例として紹介されていたけれど、こうして具体的に書いてくれるとわかりやすいね。この「測定」の対象となるものは、長さだけではなく、量なんかも含まれるよね。

生徒イ　たしかに、本文はやや抽象的な話題が中心となっているから、いくつか例を示して説明してくれていることが、私たちの理解を大きく助けてくれているような気がする。本文中の「物差」もその役割を果たしてくれているんだな。

生徒ウ　「例を示して」という言葉で、ふと思い返したのだけど、本文に出てくる「希土元素」というのは、科学において、実際上再現ができないことはやむを得ないことである、ということの例だよね。実際、私は見たことはないし、今後見ることもなさそうだもんな。

生徒エ　実際上再現ができないものがあるのは残念だけど、他人と認識を同じくするというのが科学の第一歩なのだから、まずはいったん互いを信用し合うという関係を築くことが重要だということが分かったので勇気づけられたね。

〔三〕次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。（設問の都合により場面番号1～7を付した）

1 夕食のあいだじゅう、恭介はきげんが悪かった。きげんの悪い時、恭介はいつも思う。僕はジャングルに住みたい。

「もうすぐ、卒業式ね」

すきやきのなべにお砂糖をたしながら、お母さんが言った。

「そうしたら、恭介も中学生か」

お父さんが言った。

「まだだよ。まだ二月だから小学生だよ」

「でも、もうすぐじゃないか。入学手続きだってすませたんだろ」

「うん」

恭介はぶっちょうづらのまま、しらたきを口いっぱいにほおばった。

2 今朝、学校に行ったら、女の子たちがサイン帖をまわしていた。もうすぐおわかれだね、とか、さみしいね、とか、そんなことばかり話していた。ひとりが、恭介のところにもサイン帖を持ってきた。

「俺、書かないよ」

「どうして」

「だって、さみしくねぇもん」

女の子はきまり悪そうにそこに立っていた。

「何だよ。書きたくないんだからいいだろ」

「もういいわよ。暮林くんになんかたのまない」

女の子はサイン帖をかかえたまま、小走りで自分の席にもどった。みんなの視線が恭介にあつまる。

「ちぇっ、何だよ」

恭介はどすんと席にすわった。机の上に、一時間めの教科書と、ノートと、ふでばこをだす。ちぇっ、あいつも見ていた。ななめ前の方から、暮林くんのいじわる、という顔をして、恭介を見ていた。一時間めは算数だった。(i)担任の大島は男らしくない、と恭介は思う。たとえば今日だって、

「問五、暮林くん、やってみてくれるかな」

なんて言う。

「問五、暮林やれ」

がふつうだと思う。恭介は立ちあがった。

「わかりませーん」

と言う。算数はきらいじゃないけれど、今朝はなんとなくいやな気分だったし、わかりません、と言えば先生が自分でやってくれることがわかっていた。

「わからないのかぁ。問四の応用なんだけどなぁ」

先生は頭をかきながら、黒板に問題をといてみた。

「これは基礎だからね。これがわからないと中学に行って苦労するぞ」

3 給食は、あげパンと、とん汁と、牛乳とみかんだった。恭介は給食当番で、かっぽう着を着て給食をとり

にいく。

「やった。とん汁だ」

恭介は、今までとん汁の日に給食当番になったことが一度もなかった。教室のうしろに立って、一人一人の器にとん汁をつぐ。みんなステンレスのお盆を持って一列にならぶ。あと三人、あと二人、あと一人。恭介はドキドキした。あいつの番だ。

「少しにして」

あいつが言う。恭介は、なるべく豚肉の多そうなところを、じゃばっと勢いよくつぐ。なみなみとつがれたとん汁をみて、あいつはまゆをしかめた。

X「少しにしてって言ったでしょ」

「せんせーっ、野村さんが好き嫌いします」

恭介が声をはりあげると、大島先生はまのぬけた声でこたえる。

「それはよくないなぁ。野村さん、がんばって食べてごらん」

野村さんは、大きな目できゅっと、恭介をにらみつけた。

4 お母さんが、恭介のちゃわんに、くたくたに煮えたすきやきのにんじんを入れた。

Y「好き嫌いしてると背がのびないわよ」

実際、恭介は背が低かった。野村さんは女子の中でまん中より少し小さく、その野村さんとならんで、ほとんどおなじくらいだった。

「もういらないよ。ごちそうさまっ」

恭介ははしをおいて、二階にあがった。部屋に入るとベッドの上に大の字に横になる。野村さんの顔がうかんでくる。動物でいうならバンビ※1だ、と恭介は思う。三年生の時にはじめていっしょのクラスになって、四年生は別々で、五年生、六年生とまたいっしょになった。野村さんについて恭介が知っていることといえば、保健委員で、とん汁が嫌いで、女子にしては足がはやい、ことくらいだった。今朝あんなことがあったから、今日は一日、誰も恭介にサイン帖を持ってこなかった。もちろん野村さんもだ。恭介はベッドからおりて、机のひきだしをあけた。青い表紙のサイン帖が入っている。ちぇっ、恭介はひきだしをしめて、もう一度ベッドに横になった。

中学にいったら生活がかわるだろうなぁ、と恭介は思った。勉強だってしなくちゃいけないし、先生だって大島みたいなのんきなやつじゃないにきまっている。野球とか基地ごっこばかりをやっているわけにはいかなくなる。クラスのみんなもばらばらになってしまう。あいつなんか私立にいってしまうから、なおさら会えない。あーあ。ジャングルに住みたい。

ジャングルに住んだら、と恭介は考える。勉強もない、家もない、洋服も着ない。穴をほってその中で暮らそう。ライオンとゴリラを飼おう。狩りをして、その獲物を食べればいい。皮をはいで毛布にしよう。となりのほら穴にあいつが住んでいて、僕があいつの分も狩りをしてやる。僕とあいつのほかには人間は誰もいなくて、猿とか、へびとか、しまうまとか、ペットっぽくない動物だけが住んでるといい。

5 恭介が大島先生に呼びだされたのは、次の日の放課後だった。職員室はストーブがききすぎていてあつい。大島先生は今まで生徒を呼びだしたことなど一度もなかったので、恭介は少しドキドキした。

「わざわざ呼びだしたりして悪かったね」
先生が言った。
「何の用だと思う」
「わかりません」
「そうだよな。ずいぶん前のことだし」
「はぁ」
「去年の春に、遠足に行ったろ。あのとき買い食いしたのは暮林くんだけじゃないって、わかってたんだ。代表でおこられてもらったんだよ。すまなかったね」
「はぁ」
「話はそれだけだ。もうじき卒業だから、きちんと言っておきたくてね。じゃ、気をつけて帰れよ」
「……はい」(ii)
いったいなんなんだ。へんなやつ。恭介は下駄箱(げたばこ)でくつをはきかえながら、まだ心臓がドキドキしていた。もちろん、遠足のときのことは恭介もよくおぼえていた。
僕と、高橋と、清水と、それから三組のやつらも何人かいっしょに、アイスクリームを買い食いした。集合の時、僕だけがおこられた。――でも、そんな昔のこともういいよ。教師があやまるなんて、気持ちわるい。ちぇっ、大島ともあと一ヵ月のつきあいだと思うとせいせいする。
大島先生の言葉や態度は、いつも恭介をイライラさせる。すまなかったね、なんて。もうじき卒業だから、なんて。

6 「あれ」
下駄箱の奥(おく)に、白い表紙のノートが入っている。サイン帖だった。
「誰のだろう」
ぱらぱらとページをめくり、恭介はびくんとして手をとめた。あいつのだ。あいつのサイン帖だ。どのページもみんな、なみちゃんへ、で始まっている。なみちゃんというのは野村さんの名前だった。①恭介は、すのこをがたがたとけって校庭にとびだした。冬の透明(とうめい)な空気の中を、思いきり走る。かばんがかたかた鳴る。
家にとびこんで、ただいま、と一声どなると、恭介は階段をかけあがり、自分の部屋に入った。かばんの中からサイン帖をだす。野村さんのサイン帖。一ページずつ、Ⅱたんねんに読む。おなじような言葉ばかりが並んでいた。卒業、思い出、別れ、未来。
「おもしろくもないや」
声にだしてそう言って、恭介はノートを机の上にぽんとほうった。
その日はそのあとずっと、サイン帖のことが頭をはなれなかった。夕食のあいだも、おふろのあいだも、テレビをみているあいだも、恭介は頭のどこかでサイン帖のことを考えていた。みんなの前で、僕は書かないよって言ったんだ。書けるわけがないじゃないか。それなのにこっそり下駄箱に入れるなんて、絶対、書いてなんかやるもんか。恭介はいつもより少し早く、自分の部屋にひきあげた。
ドアをあけると、机の上の白いノートがまっさきに目にとびこんでくる。あーあ。やっぱり僕はジャングルに住みたい。ジャングルには卒業なんてないもんな。そりゃあ、中学にいけばいいこともあるかもしれな

い。あいつよりかわいい子がいて、大島よりぼんやりした教師がいるかもしれない。でも、それはあいつじゃないし、大島じゃない。僕だって、今の僕ではなくなってしまうかもしれない。恭介は机の前にすわり、青いサインペンで、ノートに大きくこう書いた。

野村さんへ。

俺たちに明日はない。暮林恭介

※2いつか観た映画の題名は、そっくりそのまま今の恭介の気持ちだった。

7 次の日、恭介がサイン帖をわたすと、野村さんは、

「ありがとう」

と言ってにっこり笑った。机のひきだしにしまってある自分のサイン帖のことが、恭介の頭をかすめた。あいつの下駄箱に入れておいたら、あいつは何て書いてくれるだろう。女の子だから、やっぱり思い出とか、お別れとか、書くんだろうか。②恭介は、首のあたりがくすぐったいような気がした。教室の中は、ガラスごしの日ざしがあかるい。

「おはよう。みんないるかぁ」

教室に入ってきた大島先生が、いつものようにまのぬけた声で言う。もう三月が始まっていた。

（江國香織『つめたいよるに』所収「僕はジャングルに住みたい」新潮社　二〇一四年　による）

※1　バンビ……小鹿の名前。

※2　いつか観た映画の題名……『俺たちに明日はない』一九六七年制作のアメリカの映画。

問一　――線Ⅰ、Ⅱの本文中の言葉の意味として最もふさわしいものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

Ⅰ　まゆをしかめる

ア　まじまじと見る　　イ　じっくり観察する

ウ　合図を送り返す　　エ　不快感を示す

Ⅱ　たんねんに

ア　威勢よく勇敢に　　イ　隅々まで丁寧に

ウ　恐る恐る慎重に　　エ　あいまいでいいかげんに

問二　〰〰線(i)、(ii)について、場面2、3、6をふまえて次の(i)、(ii)に答えなさい。

(i)　〰〰線(i)「担任の大島」先生はどのような人物だと読み取れますか。最もふさわしいものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア　給食の際、生徒に言われてはじめて注意を促すなど、生徒に嫌われることを恐れるあまり教師としてあるべき姿を示すことができない人物として描かれている。

イ　算数の時間でお願いするように指名をしたり、ずいぶん前の遠足での買い食いを注意した件を今になって謝罪したりと、恭介の思い描く教師からは程遠い人物として描かれている。

ウ　普段の生徒との関わり方も不誠実で、物語の最後でも自分と恭介との間の出来事について言い訳をするなど、自分の出世と保身を第一に考える人物として描かれている。

エ　熱心であるようには見えないが、恭介を呼び出して話をするなど、生徒の成長を促そうという姿勢がみられる人物として描かれている。

(ii)　〰〰線(ii)「……はい」に表れている恭介の心情として、最もふさわしいものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア　普段生徒を呼び出すことのない大島先生に呼び出されたことで、自分の行動を振り返って反省する気持ちと他の生徒に見えないように気遣ってくれた先生への感謝する気持ちがないまぜになっている。

イ　普段生徒を呼び出すことのない大島先生に呼び出され、その珍しさと特別さを恥ずかしく感じるとともに、かなり以前のことを釈明した先生に対して大きく失望させられた。

ウ　普段生徒を呼び出すことのない大島先生に呼び出されたことで、何事かと身構えたが、すいぶん前の出来事に対する自分への謝罪の言葉を受けて拍子抜けし、困惑している。

エ　先生として認めていない大島先生に呼び出されたことにいら立ちを感じたが、大島先生から気遣いの言葉を受け、抱えていた怒りをどう処理をすればよいかわからなくなっている。

問三　═══線X「せんせーっ、野村さんが好き嫌いします」・Y「好き嫌いしてると背がのびないわよ」について述べたものとして、最もふさわしいものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア　野村さんに意地悪をしたことが恭介自身に返ってきたことから、今後、恭介の人生が暗転することがわかる。

イ　大島先生に声を掛けて対応してもらったことで、今後の恭介と大島先生の関係が改善することが予測できる。

ウ　親にたしなめられた恭介が悔しがりながらも自分を振り返る展開が、恭介の成長の余地を表現している。

エ　野村さんへ意地悪をするために使った言葉が自分へ向けられるという展開が、恭介の幼さを表現している。

問四　――線①「恭介は、すのこをがたがたとけって校庭にとびだした。冬の透明な空気の中を、思いきり走る。かばんがかたかた鳴る」の描写は恭介のどのような気持ちを表していますか。その気持ちを一文で書きなさい。

問五　――線②「恭介は、首のあたりがくすぐったいような気がした。教室の中は、ガラスごしの日ざしがあかるい」はどのようなことを表していますか。最もふさわしいものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア　時間が流れて周囲のものが変化していくことを受け入れられずにいた恭介が、野村さんのサイン帖に言葉を残したことをきっかけに、未来について少しだけ前向きに考えられるようになったことを表している。

イ　環境の変化に対する不安から野村さんに対して素直になれなかった恭介が、下駄箱に入れられたサイン帖をきっかけに野村さんの返答に対して思いを馳せ、野村さんに特別な感情を抱くようになったことを表している。

ウ　「ジャングル」という言葉を多用することで作品全体に陰うつなイメージを持たせた後に、「ガラス」という言葉で物理的な遮断を読者に感じさせることで、明るい未来を恭介が手に入れることはないということを暗に表している。

エ　両親も担任の先生も信頼できずに孤独感にさいなまれていた恭介が、自分のサイン帖を見せることで恭介を勇気づけようとする野村さんの思いやりを受け取って明るい気持ちになったことを表している。

問六　本文中には「ジャングル」という言葉が複数回登場します。恭介にとって「ジャングル」とはどのような場所ですか。最もふさわしいものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア　恭介が憂うつな気持ちの時に想像の中で逃げ込む場所が「ジャングル」である。「ジャングル」は外界から隔てられていて日本では見られない生物が多く生息する、恭介にとって特別な場所である。恭介は精神的に不安定になったとき、「ジャングル」に生息する珍しい動物たちに会うことで、心を落ち着かせようとする。

イ　恭介の虫の居所が悪い時に心に現れる場所が「ジャングル」である。「ジャングル」は野村さんと二人きりになりたいという恭介の願望が反映された、居心地の良い場所である。恭介は空想に満ちたこの場所で心の傷を癒し、何事にも積極的に取り組もうとする元気を取り戻す。

ウ　恭介が不機嫌な時に頭の中に浮かぶ場所が「ジャングル」である。恭介にとって「ジャングル」とは必要最低限の食料を手に入れたり、野村さんに会いに行ったりしていればよいだけの、心理的負担のかかる出来事が起きない場所である。恭介はここでは、現実から逃れて心の平穏を保つことができる。

エ　恭介がまだ見ぬ未来に希望を感じた時に思い浮かべる場所が「ジャングル」である。生い茂る木々の間からわずかな光が差す「ジャングル」は、恭介に将来への微かな希望を感じさせる場所である。恭介は、この空間と現実を重ねることでつらい現実への対処法を発見する。

問七　この物語を読んだ生徒A～Dが話し合っています。それぞれの生徒を説明したものとして最もふさわしいものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

生徒A　物語の中で恭介に影響を与えている「大島先生」と両親について意見を交換したいと思います。

生徒B　担任の「大島先生」は、作品内で恭介の心にストレスを与える存在として描かれていると思います。一方、恭介の両親は、恭介をやさしく支えようとする姿勢が見られますがどうですか。

生徒C　「大島先生」については同意できますが、両親の存在については疑問です。やさしく支えようという姿勢は見られないと思うのですが、どうでしょうか。恭介へのやさしさについては、場面5の「大島先生」が恭介を呼び出した場面の方に見られると思います。

生徒D　BさんもCさんもよく人物像を捉えているのですね。両親や「大島先生」の言動から、そのやさしさを読み取ることは難しいかもしれませんが、二人のようにあらゆる角度から人物を捉えることは大切なことだと思いました。

生徒B　登場回数や物語内での発言の回数の少ない人物に焦点を当てて読み進めていくことも、物語を読むうえでは大切なことですよね。

生徒C　Bさんのその意見には同意します。その他では、例えば場面6のような情景の描写にも注目しながら読み進めていくとより深く物語の世界を楽しめると思います。

生徒D　BさんとCさんの意見は物語を読むうえで重要ですね。ただ、あまりにも少ない情報から読んでいくことは深く読みすぎてしまい、読者の思いで作品を捻じ曲げてしまうことにもつながってしまう不安があります。読者が想像力に任せて味わう姿勢と、作者の表現したいことを第一に優先する姿勢のバランスをとることが重要かもしれませんね。

生徒A　そうですね。もう終わりのチャイムが迫ってきました。次回は、情景描写と主人公を囲む人物の発言や行動を参考にして、主人公の人物造形を行っていきましょう。

ア　生徒Aは司会として話し合いの内容を一旦整理した後、次回の話し合いに向けて考えて来てほしいことを確認している。

イ　生徒Bが父母について言及しているのは、家族は恭介にとって安らぎを得る存在であることを、他の生徒と共有したいためである。

ウ　生徒Cは生徒Bの意見を全否定することで、生徒Aと生徒Dに自分の考えを振り返らせようとしている。

エ　生徒Dは生徒Bと生徒Cの意見の良いところと悪いところを明確にし、尊重した上で、議論の調整をはかっている。

２０２３年度

入学試験問題

算　　数

最初に，以下の注意事項をよく読んでください。

1．問題冊子は監督（かんとく）者の指示があるまで開いてはいけません。

2．監督者の指示により，最初に問題冊子の表紙と解答用紙の，指定されたらんに**受験番号**と**氏名**を記入してください。

3．試験問題の内容に関する質問には応じません。それ以外の用事があるときは手をあげてください。

4．受験中気分が悪くなったときは，監督者に申し出てください。

5．解答用紙は持ち帰らないでください。

氏名		受験番号	1			

1　次の□にあてはまる数を求めなさい。

(1)　$\{23 \times (33 - 17) - 7 \times 38\} \div 6 = \square$

(2)　$2\frac{1}{2} \div \frac{3}{5} - \left(2\frac{2}{3} \times 1.75 - 2\frac{2}{5} \div 4\right) = \square$

(3)　$160 \times 6.8 + 14 \times 34 - 13 \times 68 = \square$

(4)　$\left(2\frac{3}{5} \times 15 - 1.25 \times \square\right) \div 2\frac{3}{4} = 6$

2　次の問いに答えなさい。

(1)　900円の品物を100個仕入れて，4割の利益を見込(みこ)んで定価をつけました。70個は定価で売れましたが，残り30個は定価の2割引きで売り，100個を完売しました。

①　値引き後の品物1個の値段は何円ですか。

②　全体の利益は何円ですか。

(2)　2％の食塩水200gに8％の食塩水を何gか混ぜ合わせたところ，4％の食塩水ができました。この食塩水から何gか捨て，同じ量の水を加えると，2.4％の食塩水になりました。

①　8％の食塩水は何gですか。

②　捨てた食塩水は何gですか。

(3)　8時に家を出て目的の電車に乗るのに，分速60mで歩くと発車時刻の1分後に駅に着き，分速80mで歩くと発車時刻の3分前に駅に着きます。

①　この電車の発車時刻は何時何分ですか。

②　8時に家を出て，この電車の発車時刻ちょうどに駅に着くようにするには，分速何mで歩けばよいですか。

(4)　Aさん，Bさん，Cさんの3人がお店で食事をし，Aさんは3人分のハンバーガー代を，Bさんは3人分のデザート代を，Cさんは3人分の飲み物代600円をそれぞれお店に支払(しはら)いました。その後，BさんはAさんに160円を，CさんはAさんに100円をそれぞれ渡(わた)すと，3人の支出は等しくなりました。

①　3人分のハンバーガー，デザート，飲み物の代金の合計は何円ですか。

②　3人分のハンバーガー代は何円ですか。

(5) 図1のような底面の半径が6 cmの円柱の形をした水そうに水が入っています。この水そうに，図2のような底面の半径が2 cmで高さが10 cmである円柱の形をした鉄の棒1本を，底面が水そうの底につくように入れたところ，棒の$\frac{1}{2}$が水につかりました。さらに図2の鉄の棒をもう1本入れたところ，棒の［ア］が水につかりました。水そうの高さは10 cmより高く，円周率は3.14とします。

① 水そうに入っている水の量は何cm^3ですか。

② ［ア］にあてはまる分数はいくつですか。

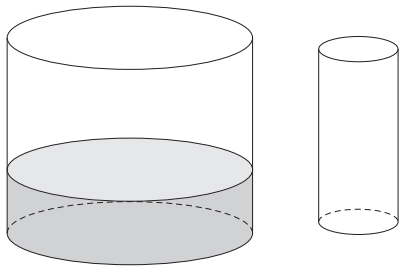
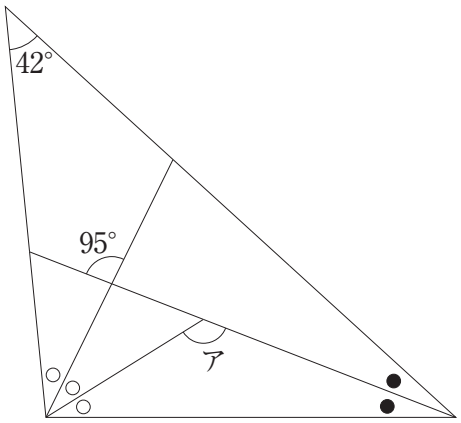


図1　　図2

(6) 右の図で，同じ印をつけた角の大きさはそれぞれ等しいです。

① 角アの大きさは何度ですか。

② ○印をつけた角の大きさは何度ですか。



3　7以上のある整数に対して，それを7で割ったときの商と余りを求め，余りを記録します。次にその商を7で割り商と余りを求め，余りを記録します。この作業を商が7より小さくなるまで続け，最後にその商も記録します。

例えば640を7で割ると商は91で余りは3となります。次に91を7で割ると商は13で余りは0となります。次に13を7で割ると商は1で余りは6となり，ここで商が7より小さくなるので終了です。このとき，余りは順番に3，0，6，最後の商は1であったため，640を

（余り3，0，6　商1）

と表すこととします。

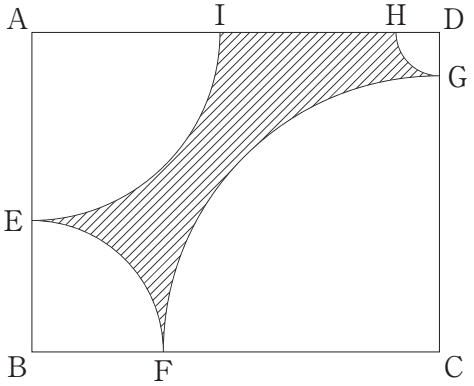
(1)　2023をこの表し方で表しなさい。

(2)　（余り2，0，2　商3）で表される数はいくつですか。

4　AB ＝12 cm，BC ＝15 cmの長方形ABCDがあります。この長方形の中に，A，B，C，Dを中心とする円の一部を図のようにかきました。円周率は3.14とします。

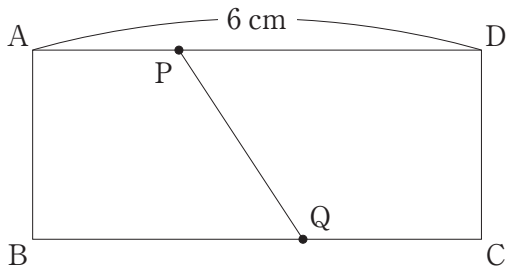
(1)　IHの長さは何cmですか。

(2)　斜線（しゃせん）部分の周りの長さは何cmですか。



5　図のような長方形ABCDがあります。２つの点Ｐ，Ｑは，それぞれ同時に点Ａ，Ｂを出発し，点Ｐは秒速３cmの速さでAD間を，点Ｑは秒速２cmの速さでBC間を何度も往復します。

図のようにＰとＱをまっすぐ結んだ線の長さについて，以下の問いに答えなさい。



(1)　出発してから５秒後までで，PQの長さが最も長くなるのは何秒後ですか。

(2)　出発してから６秒後までで，PQの長さが最も短くなるのは何秒後ですか，すべて答えなさい。

(3)　出発してから６秒後までで，PQの長さが増加しているのは合計で何秒間ですか。

6　37 名のクラスで算数のテストをしたところ，結果は下のようになりました。70 点以上が合格で，70 点未満は不合格です。また得点はすべて整数です。

得点(点)	人数
100	0
90 以上 100 未満	5
80 以上 90 未満	8
70 以上 80 未満	11
60 以上 70 未満	9
50 以上 60 未満	3
40 以上 50 未満	1

(1)　この結果から考えて，次の中から必ず正しいといえるものをすべて選んで記号で答えなさい。

ア．得点が一番高い人と一番低い人との差は 50 点以上である。

イ．得点を高い順番に並べたとき，クラスでちょうど真ん中の順番の人の得点は 70 点台である。

ウ．合格者の平均点は 77 点以上である。

エ．不合格者の平均点は 65 点以下である。

オ．クラスの平均点は 70 点より高い。

(2)　結果についてより詳(くわ)しく調べてみると，さらに以下のことが分かりました。

・クラスの平均点はちょうど 75 点であり，不合格者の平均点はちょうど 63 点である。

・クラスの平均点と同じ得点の人が 2 人いて，クラス最高の得点の人が 2 人いて，それ以外の合格者の得点はすべて異なる。

①　合格者の平均点は何点ですか。

②　クラスの最高点は，最も高い場合で何点ですか。

２０２３年度

入学試験問題

算　　数

最初に，以下の注意事項をよく読んでください。

1．問題冊子は監督（かんとく）者の指示があるまで開いてはいけません。

2．監督者の指示により，最初に問題冊子の表紙と解答用紙の，指定されたらんに**受験番号**と**氏名**を記入してください。

3．試験問題の内容に関する質問には応じません。それ以外の用事があるときは手をあげてください。

4．受験中気分が悪くなったときは，監督者に申し出てください。

5．解答用紙は持ち帰らないでください。

氏名		受験番号	5			

1　次の $\square$ にあてはまる数を求めなさい。

(1)　$2023 - 7 \times (144 + 432 \div 36 \div 4) = \square$

(2)　$8\frac{1}{10} + 2\frac{1}{4} \times \left(\frac{11}{15} - \frac{1}{3}\right) = \square$

(3)　$\left\{1 \div 5.25 + \left(\square - 2\frac{3}{7} \div 0.75\right) \times \frac{1}{3}\right\} \times 9 = 7$

(4)　$2.64 \times 58 + 26.4 \times 33.4 - 5.28 \times 46 = \square$

2　次の問いに答えなさい。

(1)　花子さんは1個の仕入れ値が600円のマグカップを30個仕入れ，仕入れ値の4割の利益を見込(みこ)んで定価をつけて売りました。しかし，仕入れた個数の半分のマグカップしか売れなかったため，残りのマグカップは定価の2割引きで売ることにしました。

①　値引き後のマグカップ1個の値段は何円ですか。

②　花子さんが損をしないためには，値引きしたマグカップを少なくとも何個売る必要がありますか。

(2)　普通(ふつう)列車が320 mの鉄橋を通過するのに20秒かかります。普通列車と速さが同じである貨物列車が970 mのトンネルを通過するのに55秒かかります。ただし，貨物列車の長さは普通列車の長さの2倍です。

①　普通列車の速さは秒速何mですか。

②　普通列車の長さは何mですか。

(3)　11％の食塩水A 480 gに，水［ア］gを加えて8％の食塩水をつくる予定でした。しかし，食塩水Aをいくらかこぼしてしまい，水［ア］gを加えたところ，7％の食塩水ができました。

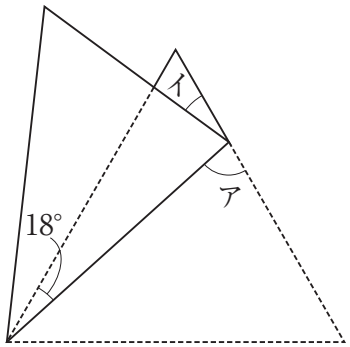
①　［ア］にあてはまる数はいくつですか。

②　こぼした食塩水Aの重さは何gですか。

(4)　右の図のように，正三角形の紙を折りました。

①　角アの大きさは何度ですか。

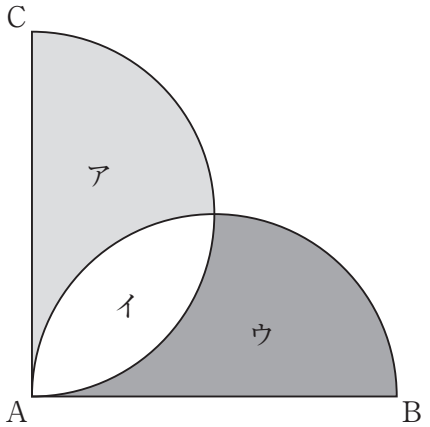
②　角イの大きさは何度ですか。



(5)　右の図は半径が等しい2つの半円を組み合わせたもので，2つの直径AB，ACは垂直に交わっています。アとウの面積の合計は32 cm²です。ただし，円周率は3.14とします。

①　半円の半径の長さは何cmですか。

②　アとイとウの面積の合計は何cm²ですか。



(6) 図のように，ＡからＧまで席が横一列に並んでいます。この７つの席に太郎（たろう）さん，次郎さん，花子さんが必ず１つ以上の席を空けて座ります。

A	B	C	D	E	F	G

① ３人が，Ａ，Ｃ，Ｅの席に座るとき，座り方は全部で何通りありますか。

② 座り方は全部で何通りありますか。

3 ある４つの整数を小さい順にＡ，Ｂ，Ｃ，Ｄとします。この４つの整数の中から２つを取り出し，その和を求めると 30，33，39，40，46，49 の６通りになります。

(1) ＢとＣの差はいくつですか。

(2) ＢとＣの和について考えます。次の文章の［ア］，［イ］にはあてはまる数を，［ウ］にはあてはまる言葉を**「和」と「差」という用語を必ず両方とも使って**答えなさい。

> 条件からＢとＣの和は［ア］か［イ］のどちらかである。(1)の結果から
> ［　　ウ　　］となり，ＢとＣの和は［ア］とわかる。

(3) Ｄはいくつですか。

4 ある中学校の全校生徒数は 336 人です。１人１票ずつ投票して，立候補者Ａ～Ｆの６人の中から４人の生徒会の役員を選ぶ選挙を行います。ただし，獲得（かくとく）した投票数が同じ候補者がいて，４人を選びきれないときは考えないことにします。

(1) 必ず当選するためには，最低何票獲得する必要がありますか。

(2) 276 票まで開票したとき下の表のようになっています。

	A	B	C	D	E	F
票	81	72	42	41	30	10

Ｅが必ず当選するためには，残り 60 票のうち最低何票獲得すれば当選できますか。

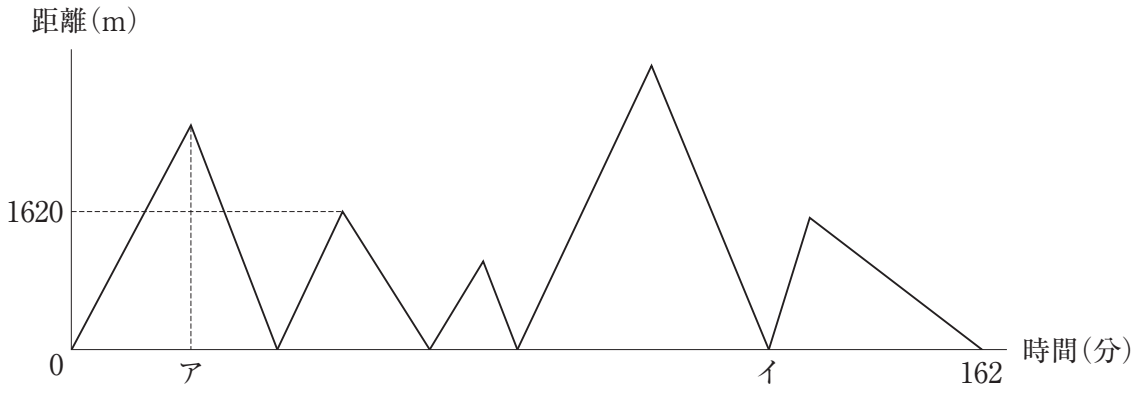
5　ＡさんとＢさんの２人は同時にＰ町を出発し，Ｐ町とＱ町の間を次のように往復をしました。

［Ａさん］一定の速さで何往復かしました。

［Ｂさん］行きはＡさんの $\frac{1}{4}$ の速さで，帰りはＡさんの $\frac{1}{2}$ の速さで１往復しました。

その結果，２人は同時にＰ町に着きました。

下のグラフは，２人がＰ町を出発してからの時間と，２人の距離（きょり）の関係を表しています。

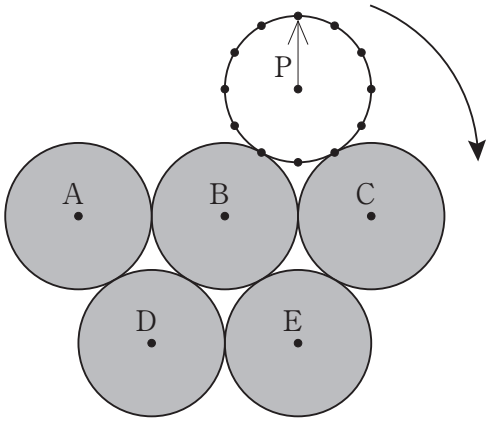


(1)　アはいくつですか。

(2)　ＢさんがＱ町からＰ町に向かったときの速さは分速何ｍですか。

(3)　イはいくつですか。

6　右の図のように，半径3cmの5つの円A，B，C，D，Eがぴったりくっついている図形と半径3cmの円Pがあります。円Pは，はじめ右の図の位置にあり，円Pの内部には図のように矢印が真上の向きにかかれています。いま，円Pが5つの円のまわりをすべらないように回転して1周し，はじめの位置にもどります。ただし，円周率は3.14とします。



(1)　円Pの中心が動いてできた線の長さは何cmですか。

(2)　円Pがはじめの位置にもどったとき，円Pの内部にある矢印の向きはどうなるか，解答用紙の図にかきなさい。ただし，図の•は円周を12等分した点です。

２０２３年度

入学試験問題

算　　数

最初に，以下の注意事項をよく読んでください。

1．問題冊子は監督（かんとく）者の指示があるまで開いてはいけません。

2．監督者の指示により，最初に問題冊子の表紙と解答用紙の，指定されたらんに**受験番号**と**氏名**を記入してください。

3．試験問題の内容に関する質問には応じません。それ以外の用事があるときは手をあげてください。

4．受験中気分が悪くなったときは，監督者に申し出てください。

5．解答用紙は持ち帰らないでください。

氏名		受験番号	7			

1　次の□にあてはまる数を求めなさい。

(1)　$842 - 12 \times \{83 - (61 - 7) \div 3 + 5\} = \square$

(2)　$3.75 \times \left(1\frac{7}{15} + 1.6\right) \div 3\frac{5}{6} - 0.78 = \square$

(3)　$\frac{2}{3} \times \left(3\frac{2}{5} - \square\right) \div 1\frac{1}{2} + \frac{1}{6} = \frac{9}{10}$

(4)　7.48にある数をたして小数第2位を四捨五入したところ，8.6になりました。ある数は□以上□未満です。

2　次の問いに答えなさい。

(1)　みかんを箱に７個ずつ入れたところ，空の箱が２箱できてしまったので，６個ずつ入れ直したところ，みかんが13個余りました。

①　用意していた箱は何箱ですか。

②　みかんは全部で何個ですか。

(2)　ある本を１日目は全体の $\frac{1}{5}$，２日目は残りの $\frac{1}{3}$，３日目はその残りの $\frac{3}{4}$ を読んだところ，残りのページ数は，１日目に読んだページ数より25ページ少なくなりました。

①　残りのページ数は全体の何分のいくつですか。

②　この本は全部で何ページですか。

(3)　８で割ったら６余り，９で割ったら７余る，１以上の整数について考えます。

①　最も小さい整数はいくつですか。

②　最も大きい３けたの整数はいくつですか。

(4)　母，太郎（たろう）さん，花子さんの現在の年齢（ねんれい）の和は66歳（さい）で，太郎さんは花子さんより４歳上です。２年前，母の年齢は，太郎さんと花子さんの年齢の和の２倍でした。

①　花子さんは現在何歳ですか。

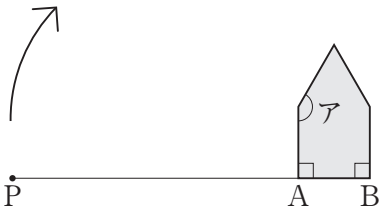
②　母の年齢が，花子さんの年齢の３倍になるのは，今から何年後ですか。

(5)　ある中学校の１年生は男子と女子の人数の比が６：５です。また，この中学校の２年生は222人で，男子は１年生の男子より５％少なく，女子は１年生の女子より８％多いです。

①　２年生の男子と女子の人数を，最も簡単な整数の比で表すといくらですか。

②　１年生の男子は何人ですか。

(6) 右の図の五角形はすべての辺の長さが 2 cm です。頂点Aには長さ 8 cm のひもがついていて，ひもの先端（せんたん）Pと頂点A，Bは同じ直線上にあります。このひもを，たるまないようにピンと張った状態で，点Pを矢印の方向に動かして，五角形に巻きつけます。ただし，円周率は 3.14 とします。

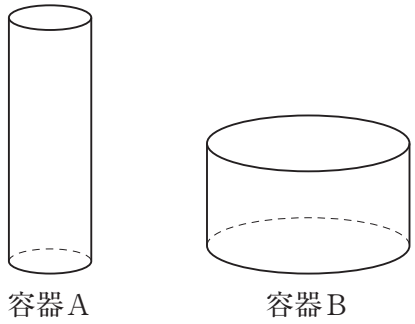


① 角アの大きさは何度ですか。

② 点Pが動いてできた線の長さは何 cm ですか。

3　下の図のような円柱の形をした容器Ａと容器Ｂがあります。この２つの容器の展開図をかくと，側面はどちらも合同な長方形となり，長い辺と短い辺の長さの比は２：１です。

容器Ａには，容器の $\frac{2}{3}$ まで水が入っていて，容器Ｂは空です。ただし，円周率は 3.14 とします。



⑴　容器Ａと容器Ｂの底面積の比を最も簡単な整数の比で表すといくらですか。

⑵　容器Ａの水を容器Ｂへ，容器Ａと容器Ｂの水面の高さが等しくなるように移しました。このとき，容器Ｂに入っている水の量は，容器Ｂ全体の何分のいくつですか。

4　1から15までの異なる整数が書かれた15枚のカードがあります。これらのカードから1枚ずつ，計2枚選び，選んだ順に左からカードを並べて整数をつくります。例えば，1番目に「4」，2番目に「15」を選んだときは，「415」という整数ができます。

(1)　1番目に選んだカードが1けたの整数のとき，3けたの整数は全部で何個できますか。

(2)　花子さんは，3けたの整数は全部で何個できるかを，次のように数えました。

「1番目のカードが1けたの整数のとき，(1)で求めた個数だけ整数ができるから，
1番目のカードが2けたの整数のとき，できる3けたの整数の個数を求めて，
その個数と(1)で求めた個数の和を求めればよい。」

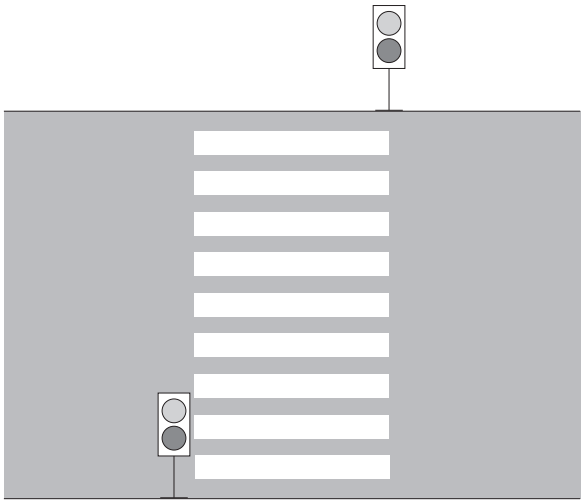
しかし，この数え方で求めた個数は正解の個数より多くなってしまいました。その理由を，取り出したカードを例にあげて述べなさい。

(3)　3けたの整数は全部で何個できますか。

5　下の図のような幅(はば)20 m の道路と，その道路を渡(わた)るための横断歩道があります。

横断歩道には，歩行者用の信号があり，青になってから点滅(てんめつ)して赤に変わるまで 25 秒かかります。点滅する時間は 7 秒間です。

太郎(たろう)さんは，この横断歩道を道路に対して垂直にまっすぐ渡ります。



(1)　太郎さんが，信号が青に変わると同時にこの横断歩道を一定の速さで歩いて渡りました。太郎さんが横断歩道を渡り終えた 2 秒後に信号が点滅しました。太郎さんの歩く速さは，秒速何 m ですか。

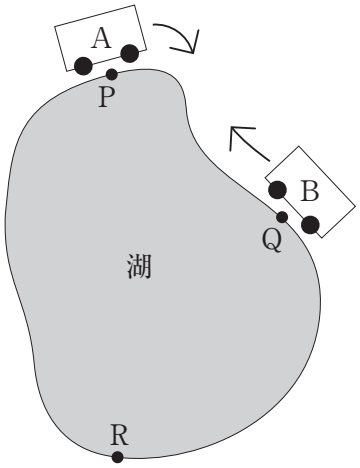
(2)　太郎さんは(1)で求めた速さで歩き，歩く速さの 2 倍の速さで走ります。

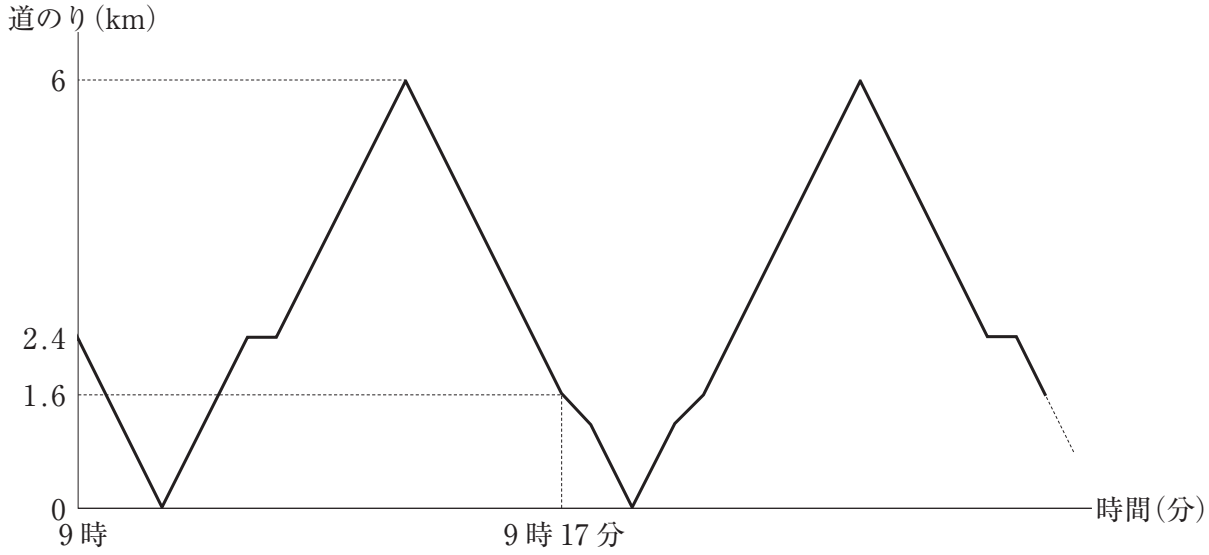
太郎さんがこの横断歩道を歩いて渡っていると，8 m 進んだ地点で信号が点滅し始めました。信号が赤に変わるまでに横断歩道を渡り終えるためには，太郎さんは少なくとも何秒間走ればよいですか。

6　周りの長さが12 kmである湖に沿って，時計回りに走るバスＡと，Ａと逆の向きに走るバスＢがあります。

２台のバスは，午前９時に，バスＡは停留所Ｐを，バスＢは停留所Ｑを同時に出発します。走る速さは同じです。停留所はＰ，Ｑ，Ｒの３か所にあり，それぞれの停留所で１分間とまります。２台のバスが午前９時に出発してから停留所Ｒに先に着いたバスはＡでした。

下のグラフは，２台のバスが出発してからの時間と，２台のバスの間の道のりの関係を表しています。





(1)　停留所Ｑから停留所Ｒまでの道のりは何 kmですか。

(2)　バスは分速何 mですか。

(3)　２台のバスが出発してから５回目にすれ違(ちが)うのは，午前何時何分ですか。